風の王国第二王女の苦労記

ロシアよ永遠に

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

本来、存在するはずのないローラント王国第二王女『リリィ』

彼女は、優秀で美人な姉と、聡明な弟にほのかなコンプレックスをいだいていた。

だがそんな彼女の不幸なんぞ知るかと言わんばかりに、奴は降臨した。

魔法が使えないコンプレックスなぞドブに捨てて、奴は剣をとる。

そして今日も今日とて、リリィの護衛（ストーキング）に精を出す。

目次

登場人物紹介 ―――― 1

ストーカー編

『私の騎士は変態さん』 ―――― 7

『幼き夢は、今の悪夢』 ―――― 27

『風邪は一種の自白剤？』 ―――― 44

『煩悩の矛先』 ―――― 52

『泳ぎに行こう！』 ―――― 60

『泳ぐ練習をしてみよう』 ―――― 72

『下着泥棒と変態』 ―――― 80

『御奉仕されるのも悪くない』 ―――― 92

『二人のグルメ　風の王国兵舎食堂の鶏南蛮定食とホイル焼』 ―――― 103

紅蓮の騎士　誕生編

『正夢と、夜這い的な何か』 ―――― 123

『少年の行方』 ―――― 133

『英雄王との邂逅』 ―――― 141

『騎士道の始まり』 ―――― 155

『私が、変わるとき』 ―――― 163

『私が、変わったとき』 ―――― 171

『彼との約束』 ―――― 177

『２人の任務』 ―――― 184

『帰郷の決別』 ―――― 190

『旧友との再会』 ―――― 201

『遭遇』 ―――― 210

登場人物紹介

リリィ

身長　１４９センチ

体重　国家機密（３６ｋｇ）

３サイズ　国家機密（７５　５８　７８）

年齢　１５歳

趣味　フラミーとの戯れ

好きなもの　はちみつドリンク入りミルクセーキ

家族

■■■■■（何やら黒いインクで塗りつぶされている）

苦手なもの　ブライアンのストーキング

勉強

槍術の訓練

自分自身

クラス　ランサー　Ｌｖ８

外見　リースを少し幼くさせた感じ。髪型も、リースは毛先をリボンで纏めているのに対し、リリィはうなじで1つに纏めている。

原作には存在しないローラント第二王女。

礼儀正しく、そして真面目でツッコミ役。

周囲が真面目な顔をしてボケてくるので突っ込まざるを得ない。そしてちょっと背伸びしたいお年頃。

日々、ローラント第二王女として恥ずかしくないように勉学や武術に励んでいるものの、その成果はイマイチで、それが優秀な姉と弟に対するコンプレックスになっている。

日々ブライアンの変態的ストーキングに日々悩まされており、どうやって彼を撃退するかを思案している。

が、時折見せる彼のイケメンぶりにときめいていたりするものの、すぐに見せる変態行動、もしくは発言で熱が冷めていたりする。

何故かフラミーや、彼女の友人（？）であるブースカブーと仲が良い。

ちなみに槍術の腕前は、リースには及ばないものの、アマゾネス隊でも5本の指に入るほどには実力がある。

（ちなみに身長とスリーサイズは禁句。そして彼女自身、隠された秘密がある）

ブライアン（紅蓮の騎士）
身長　１７８センチ
体重　７０キロ（原作より体重が増えたのは、鍛錬による筋肉）
年齢　２０歳
趣味　リリィ様の護衛
　　リリィ様への奉仕
　　リリィ様からのお仕置き
好きなもの　リリィ様こそ至高
　　剣の鍛錬
苦手なもの　ピーマン
　　泳ぎ
クラス　ロード　Ｌｖ４０
この世界で（ある意味）最も歪んだ存在で、いわゆる残念なイケメン。
絶望の憂き目に遭っていた幼き日に道を示してくれたリリィを深く崇拝し、ロードとなってローラントにやって来た変態騎士。基本的には紳士。
その行動はリリィの護衛（ストーキング）に始まり、奉仕と言う名の部屋突入。そしてそれによるお仕置きと言う名のご褒美が主な流れ。そして悦んでいるとか。

しかしいくら拒絶されようとお仕置きされようとも彼女に付き従う、ある意味忠犬ハチ公。
そんな変態行動と思考とは裏腹にその実力は本物。伊達にクラス3になっているわけではなく、並大抵の敵に苦戦するものでもない。
また、研鑽を重ねることによってマナの流れに理解を深め、簡易な魔法なら扱えるようになった。
だがその有能さが活かされることはほぼ無いに等しい。
全てはリリィ様のために…

ジョスター王
ローラント現国王。
とある事故により失明しているが、その風の流れや人の本質を読むことによる先見の明は抜きん出ている。
基本はおおらかな性格で、穏やかに子供達の成長を見守っている。
ブライアンに関しても、彼の中にある忠誠心をしっかり理解しており、彼の変態行為とリリィのやり取りを微笑ましく感じているらしい。

リース
クラス　アマゾネス　Ｌｖ２０
皆大好きローラント第一王女。
しっかり者で頭脳明晰で武術にも長け、その儚ささえ感じさせる美貌は、多くの大きなお友達を魅了した。
真面目である一方、天然なところもあり、ブライアンの変態的行為と、それをあしらうリリィのやり取りか、愛故であると思っているらしい。（何故そこで愛!?）
武術においてはアマゾネス隊隊長を務めるほどに高く、その上を征くブライアンとは度々手合わせしており、その実力は高い。しかしクラスはアマゾネスのまま。何らかの大いなる力（お友達の欲望）の作用と思われる。

エリオット
原作では出番がほぼリースルートの最初と最後のみのローラント空気第一王子。
幼いながらも聡明で、将来の王としての器を感じさせるショタ。
姉２人からも深く愛されており、またエリオットも姉２人を愛している。姉ショタ言

うな。

ブライアンのことも慕っており、彼から剣術の指南を受けている。

ブライアン曰く、『速さなら、そう遠くない未来に私を超えるだろう』とのこと。

ストーカー編

『私の騎士は変態さん』

私…リリィは、極めて平凡だった。
私には1つ年上の姉が居る。
姉は、私と比較して聡明で、そして気高く、更には美しい。
同性の私からしてみても、そう感じるほどに。
武においても、若干１６歳にして、王国を守るアマゾネス隊隊長を務めるほどに槍術に長けている。
まさに天は姉にいくつもの才を与えたと言っても過言ではないだろう。
対して私は、
勉学は姉に及ばず、
姉のように誇り高くもなく、
姉には似ているけれど、そこまで美しいものでもなく、
槍術の模擬戦も負け越し…。
唯一誇れるところがあるとすれば、高くもないが魔法適性があったことくらい。

こんな私を姉は可愛がってくれた。
母の命と引き換えに生まれた弟も、私が育てねばと言わんばかりに姉は、時には母のように、時には姉のように、優しくも厳しく接していた。
そんな姉を、私は誇りに思っていたし、しかし同時に私の双肩にのし掛かってきていた。
そして何処かで思ってしまう。
皆は口にはしないが、私は姉と比べられて落胆されているのではないか、と。
勿論そんなことはないだろう。
しかし、私は姉と比べて余りにも平凡過ぎた。
そして皆から見られる度に感じてしまう。
「どうしてお姉様の方は出来るのに…」
「同じ血筋なのに…」
そう真しやかに囁かれているのではないかと。
実際聞いたわけでは無いが、そう疑ってしまっている私が居た。
そしてその重しは、弟が成長してきて更に顕著に感じていた。
弟は姉と同じく聡明だった。
私が弟と同じ年齢の時と比べても、その頭脳は弟のほうが優れていた。

勿論、弟はそれに驕ることもなく、姉と同じく私も慕ってくれていた。
だが、
私の胸の締め付けは、日に日に増していくだけだった…。
私には何が出来るのだろう？
何を残せるだろう？
「無論！私にとってマナの女神様さえ凌駕する、聖女の如きリリィ様がこの世におわしたと言う伝説です！」
そんな悩みを別な意味で吹き飛ばすのは、目の前に居る赤いローブを纏った茶髪の男性…。
「私はリリィ様の狗！御主人様を称え、そして傅くのが天命！故に崇拝は、正しく息をするかのような行為に等しいのです！さぁ、リリィ様！この卑しい狗めに、何卒！何卒、御命令下さい！」
王国の往来の真っ只中で、自身を家畜認定する彼は、やっぱり頭をやられていたんじゃないかと思う。

『紅蓮×私　しいくれっと・さぁびす』

「流石はリリィ様…お食事を召し上がるお姿も神々しい…！」
「嗚呼…私はリリィ様が口に運ばれるコカトリスの肉になりたい…！」
「あ…あぁ…ッ！リリィ様…！」
「食事中なので…静かにして頂きたいのですけど？」
　あぁやこうやと食事中に私を褒めちぎる彼に、私は鋭い言葉の釘を刺しておく。何か痙攣してるし、正直気持ち悪い。
「ほっほ…リリィも中々…良い風の御仁を見つけてきたものよな。親として、鼻が高いぞ？」
「いや、どう考えても変態のそれでしょう!?」
　暢気に、見えない目ながらも流暢に食事を進めるのは、父であるジョスターだ。
　その昔に受けた傷によってその視力を失っておられるものの、それを補って余りある

世を見渡す程の勘の鋭さを持っておられる。
「ジョスター王に褒めて頂き恐悦至極…つきましてはリリィ様と添い遂げさせて頂きたく…！」
「何を勝手に話を進めて…！」
「まぁ！リリィと結婚されるんですか？式はいつにしましょうか？」
「お姉様!?鵜呑みにしないで!?」
お姉様であるリースが、いつもの凜々しい表情から一変。
ニコニコと思いっきり首を突っ込んでくる。
「では兄上とお呼びする練習をしておかねばなりませんね！」
「エリオットオオオ!?」
弟のエリオットまでこんな始末…
もうやだ
私の家族が色々天然すぎる件について
「そ、そもそも！私はまだ15ですよ!?まだその…け、結婚なんて…。」
結婚
確かにそれは将来のヴィジョンとしては朧気ながらもある。
愛しい男性と添い遂げ、子を育み、共に年老いていく。

そんな未来に思いを馳せるのは、何らおかしなものでは無いだろう。
だが、今は自身を未熟と理解しているからこそ、まだ結婚というものは早いと考えるのであって…。
「ご安心下さい、リリィ様。」
傅いて食席に座る私の手を取り、その整った顔立ちで柔らかな笑みを浮かべて見上げてくる。流れるような腰まで届く三つ編みの茶髪と相まって、一瞬ドキリとさせられる物があった。
「15という齢は、十分私の守備範囲ですので。」
その甘酸っぱい胸の高まりは、やはり一瞬で冷めた。

「よっ…と！」
警備（と変態）の目を盗んで3メートルはあろうかという金網を乗り越え、その先にある王国の聖域とも言われる天の頂へと駆ける。服装は、普段のドレスとは違い、お姉様のアマゾネスのそれに酷似した服へと着替えている。

切り立った崖の山道を、慣れた足取りでブーツの靴底を鳴らしつつ登っていく。
この辺りは昔から良く忍び込んでいたので、最早私の庭に等しい。モンスターもいるけど、彼らは縄張りに入らない限りは襲ってこないので、知り尽くした安全ルートを、ひたすら歩いて行く。
険しい道なので、良い下半身の鍛錬にもなるし。
そうして歩くこと１０分ほど。
一際高く切り立った岩場。
そこが『私達』の秘密基地。
たなびく風に髪を抑えながら岩場に立てば、眼下に王城を一望出来る。
台地の天板…例えるならプリンのカラメルのポジションに聳える城壁に囲まれた城。
天然の立地を利用したそれは、世界で真しやかに難攻不落の名を欲しいがままにしている。
そして風の精霊ジンと、同じく風のマナストーン。
その恩恵でこの国は外敵から守られていた。
「キュクル？」
「ええ、やはりここから見るローラント城の美しさは、絶景ですねフラミー。」
いつの間にか隣に居るのは、『翼あるものの父』と言われている女の子。

白く巨大な体躯に二対の翼。一見すると、竜か何かを彷彿させるその威圧される見た目だが、その外見とは裏腹に、少し臆病なだけの子。

数年前から城の者の目を盗んで会いに来ているので、今では数少ない友人の一人となっていたりする。

かく言う彼女も、友人は殆どいないらしく、一度だけ背に乗せてその友人に会わせて貰った相手は、巨大な亀か何かを思わせる外見の生き物だった。…そもそも、亀なのにシュノーケルを付けていたり、背中に旗が立っていたり、ちょっと変わった見た目だったけど。

「…で、ですよ？あの人は着替えてるのに私の部屋に入ってきて、『リリィ様にはやはりいつもの白が似合いますが、時には大人の黒というのも背伸びした風が感じられて、私的には惹かれます！』って、タンスを物色してたんですよ!?」

「キュ～。」

気が付けば、フラミーに対して愚痴っていた。

以前に『あの変態』が部屋に不法侵入したときのこと。思い出しただけでも腹立たしいので、その怒りを吐き出していた。

何せその時、タンスの奥に隠しておいた、『ちょっと背伸びパンツ』を広げてまじまじと見ていたのだから、殴ってぶっ飛ばした私は悪くない、はず。

フラミーはイマイチ理解できていないようだったが、それでも彼女が話を聞いてくれる（と私は思っている）だけで、どことなく気が楽になっていく。

「全く…ああ言う変態行為がなかったら…少しは……。」

「キュ？」

そもそも何で私なのか？

私なんかよりもお姉様の方が、世の殿方の目に止まるだろう。なのに何故妹の私なのかが理解できなかった。

それでも一途に思ってくれるのは確かに嬉しいものだが、その変態行為が、嬉しさ余って評価の底を割っていってることに気付かないのか？

「…と、少し長く話し込んでしまいましたね。そろそろ戻らないと、お姉様やじいに怒られてしまいます。」

気付けば西日が差し込む時間帯になってしまっていた。余程鬱憤が溜まっていたのだろう。手頃な岩場に座り込んでいたため、スッと立ち上がると、お尻に付いた砂埃をポンポンと払う。

もう帰るのか？と言わんばかりに首を傾げるフラミーに苦笑いが浮かんでしまう。

「大丈夫ですよ。また時間が空けば会いに来ますから。」

寂しげなフラミーの頬をそっと撫でれば、まるで猫のように目を細めてすり寄せてく

る。

あぁ…可愛い…！

お持ち帰りしたい…！

したいけど、この子はローラントでは神聖な存在だからそれはできない。連れて帰ろうものなら、じいの入れ歯が飛び、アルマが腰を抜かしてしまうだろう。

何より、フラミーにとっては狭い城よりも、自由な大空の方が良いだろう。

ひとしきり撫で終えて、名残惜しそうにするフラミーから手を離して一歩下がる。

「それじゃ…フラミー、また来ますね。」

振り返り、下山し始めようと一歩踏み出したとき、下山道にそれは居た。

鈍く夕日を反射するガシャリと重厚な鎧。

その右手には鋭く輝く両刃の騎士剣。

そして頭部を覆う兜。しかしその奥にあるはずの瞳はなく、空洞だ。

アーマーナイト

このローラント山岳地帯全域に出没するモンスターだ。

天かける道や風の回廊にも生息しているこのモンスター…。しかし、目の前のアーマーナイトはその力量（レベル）はその地域のそれを凌駕しているのがひしひしとわかる。伊達にこの天の頂の厳しい地形とモンスターに揉まれた訳ではないらしい。

恐らくは…今の私では太刀打ち出来ないほど。
しかし、どちらにせよ、今のこの状況を打開するには戦わなければならないのはわかる。
背中に携えたトライデントを構え、相手を睨み付ける。
せめてもの威嚇。
だが、視線を奴は逸らした。
まるで眼を切っても問題ない、歯牙にもかけない相手だと言わんばかりに。
「この…舐めるな…！」
伊達にお姉様に鍛えられては居ない。
山道で鍛えられた脚力を武器に、高速で私は肉薄する。その勢いで三つ叉の槍をアーマーナイトの兜目掛けて思い切り突き出す。いくら力量差があっても、それ程の重厚な鎧を纏っていては対応できないだろう。
そう思っていた時期が、私にもありました。
あろうことか、アーマーナイトは避けるどころか、逆に間合いを詰めてきた。
それにより、一番の威力を発揮するタイミングを外されてしまう。
挙げ句、その重厚な鎧。そして兜によって、軽量な私は物の見事に弾き返され、図らずも間合いを離されてしまう。

「くっ……！」
思わぬ反撃に思わず歯噛みする。追い打ちを警戒し槍を構えるが、相手は微動だにせず、それどころか未だに視線を逸らして通せん坊しているではないか。
まるで、掛かってこい。と言わんばかりに。
それが益々、私の心を煮えたぎらせる。
「ハァァァッ!!」
突き
払い
突き上げ
虚を突いての石突き
考え得る技を使い仕掛けるも、そのどれもを何の苦もなく捌かれていく。
そうする内に気付いてしまう。
遊ばれている、と。
いくら力量差があれど、ここまで楽々と捌かれて、なおかつこちらに決定だと言える攻撃をしてこないのだから、そう感じるのが自然と言うものだ。
「こうなったら……！」
焦りと憤りが、私を短慮にしていた。

詰めていた間合いを一旦取り、しっかりと両足で踏ん張る。
残された体力を以て、私の放てる最高の一撃を放つのだ。
「行きます！」
その大きな声と共に放たれた気迫。それはアーマーナイトの意識を、漸くこちらに向けさせるまでに至る。
後にも先にも、この一撃が最後。
これで倒しきれなかったら、最早後がない。
だったら込められる全てを込めて、そしてその上で討ち果たすのみ。
「ハァァァッ!!」
頭上で、槍を回す。
まだ遅い。
まだ早く、
もっと早く、
もっと力強く、
もっと高速に！
空気を裂き、その中央に集約される風は、やがて私の周囲に渦巻き、そしてその大きさは私を包み込める程の巨大な竜巻と化す。

「これで…！」
槍を振り抜けば、その巨大な竜巻はアーマーナイトへ、まるで意思を持つかのように突っ込んでいく。
槍を防がれるなら、技巧による防御が意味を成さない攻撃を仕掛ける。
それが私の出した答えだ。
そしてそれは、上手く功を奏する。
アーマーナイトは吹き荒れる暴風が厄介に感じたのか、剣を盾に使い、少しでも風を抑えようと守りに入ったのだ。
やれる！
今、渾身の力を込めて…
槍を、矢を射るように引き絞る。
「旋風槍!!」
お姉様に教わった、所謂必殺技。
巻き起こした竜巻で相手の動きを拘束し…仕上げに、
「やぁぁぁっ!!」
渾身の一突きで相手を仕留める！
守りに入ったことで、アーマーナイトの頭部は剣に隠れて、こちらの動きが死角に

なっている。
これなら！
勝ちを確信した私は、そのまま流れるように槍を突き出してアーマーナイトに突進していった。

そう思った。
踏み出した瞬間、
私の繰り出した竜巻はことごとく消え去った。
そうそう自然に消えるものでもないはず。
だとしたら、何が原因で…？
そう考えたときには遅かった。
気付けば、青々とした空が視界いっぱいに広がり、身体が宙を舞っていたのだから。
「え……？」
何とも気の抜けた声だった。
身体に力が入らない。
手の感覚がなく、持っていたはずの槍も、手放しているのか否かも見当が付かない。

ただ、
ガシャリと鎧の軋む音だけは、嫌に鮮明に聞こえた。
『旋風剣』
周囲の風がアーマーナイトの剣に集約されていく。
恐らくは私の旋風槍の竜巻も、旋風剣の風に打ち消されたんだろう。
吹き飛ばされて、ゆっくりと感じられる落下の感覚に身を預けながら、私はアーマーナイトの技を軽く分析する。
視界の隅にアーマーナイトが映る。
その携えた剣に、風が渦巻いているのが見て取れる。
そして振りかぶる。
アレが振るわれれば、数多の剣閃が繰り出され、私の命を絶ちきってくるだろう。
口を酸っぱくして、天の頂に至る道を征くことはならないという言いつけを破った罰か。
お姉様…
エリオット…
お父様…
リリィは…王国不孝者（？）です…

諦めにも似た思いを胸に、そっと目を閉じる。
…こんなことになるなら…もう少しあの変態さんに構ってあげたら良かったなぁ…。
そして来るであろう斬撃と、それによる激痛に身構え、覚悟する。

しかし、
自身を包む、まるで羽毛のようなフワリとした感覚。
温かく、安心する何か。
もはや開くのも辛い瞼を開く。
その目先に居たのは…
「遅くなり申し訳ありません、リリィ様。貴女様の狗、紅蓮の騎士ブライアン…馳せ参じました。」
夕日に映える茶髪と紅蓮のマントを靡かせて、あの変態さんは居たのだ。
しかも私は横抱きにされ、所謂お姫様抱っこをされていたことに、ややあって気付く。
「ブライ…アン…さん…?」

「はい、我が姫よ。」
そう私に語りかける彼の目は、何処までも優しく、そして温かい。
諦めていた私の心を、暖炉の火のように温かく包み込んでくる。
「少々お待ち下さい。不届き者を、私が始末してきます故に。」
そっと私を岩場にもたれさせるように優しく座らせる。切り傷が正直痛み、受けたダメージで意識が朦朧とするが、ブライアンさんのお陰で幾何か気持ち的に楽になっていく。
「すぐに、終わらせます。」
腰に携えた騎士剣を抜き取った彼を見たアーマーナイトは、舐めていたその構えを解き、確りと剣をブライアンさんに突きつける。
それ程までに、彼は強いのだ。
「すぐに終わらせると言った。既に私の堪忍袋の緒は切れている。許さんぞ。」
殺気と共に構えた右手には蒼の魔方陣が展開される。
その魔方陣から発せられた光の奔流は、まるでアーマーナイトに纏わり付くように迸る。
「動けまい。」
魔力による拘束。

そして…

「我が姫君に剣を向けた罪、刻むが良い！」

魔方陣越しに騎士剣を振るい、魔方陣から魔力の斬撃がアーマーナイトを刻んでいく。

『魔方陣斬』

なすすべも無い、唯一方的な蹂躙。

「今日の私は…黄金の騎士ロキすら凌駕する存在だ！」

そして、トドメと言わんばかりに、魔方陣その物を２つに両断。

それに伴い、アーマーナイトも魔方陣と同じ剣閃で真っ二つに両断され、無に帰した。

凄い…。

いつもの変態さ加減からは想像できないほどに強く、そして洗練された剣戟。

そんな人に、私は守られていたんだ…。

「リリィ様。お気を確かに。今、城へと戻ります故。」

再び私を横抱きにして、彼は私を気遣って揺らさないようにゆっくりと山道を下っていく。

アーマーナイトが討ち果たされたことで…

私は緊張の糸が切れたのか、彼に抱かれて揺られる心地よさに身を委ねて意識を手放

した。

『幼き夢は、今の悪夢』

11年前

私は、お父様、お姉様と共にローラント領の漁町パロに、私のお目見えも兼ねて視察に来ていた。

この時は長い長い天かける道を歩くというのは、当時4歳の私には途轍もない重労働だったのを鮮明に覚えている。

しかし、いざこのパロに着いてみれば、ローラント城にはない、町人の温かな歓迎が私を出迎えてくれた。

そして、今まで見たことのない港町特有の活気が、幼い私の好奇心をくすぐっていたことも鮮明に覚えている。

獲れた魚介類を競りに賭ける漁師。

他国からの輸入物資の取引をする業者。

港に駐留する巨大な貿易船。

そのどれもが、本以外で見る現物だったのだから。

「わぁ……!すっごくおっきな船です!」

「ふむ、この時期のこの時刻…マイアへと向かう船だな。」
「まいあ?」
「ここより遙か西にある、草原の国フォルセナの領地にある都市よ。自由都市って言うくらいに貿易が盛んで、とっても賑わってるらしいわ。」
「ほえ～。」
齢5歳と思えないほどに、この頃からお姉様は才女ぶりを発揮していた。とても勤勉で、空いた時間には書庫に出入りしてるほどに。
「うむ、さすればリースよ。そのフォルセナを統べる王は知っておるか?」
「もちろん!昨年の世界大戦を終結に導いたリチャード国王です。その功績から、各国では英雄王と呼ばれていますね。」
「そう、それ故に近頃は彼を慕い、世界中から仕官する強者が多いと聞く。時にリリィよ。ローラントでは槍があるように、フォルセナで盛んな武術は何か分かるか?」
「ふぇっ!?え、えっと…その……ま、魔法、ですか?」
今となって思えば、随分と恥ずかしい答えを出していたと、過去の自分を叱ってやりたかった。
「ふむ、それはフォルセナの北にある魔法王国アルテナだ。フォルセナは剣術が盛んなのだ。故に、国を守る兵士を騎士と呼ぶのだよ。少し、教養が足りぬなリリィよ。」

「はぅ…。」
やっぱり、お姉様のようには行かないものだと、幼いながらに悔しかった。
…いや、ただ単純にお父様に褒めて欲しかったんだろう。
ともすれば、この頃から私は、自身にコンプレックスを抱いていたのかも知れない。
「まぁ、堅苦しい勉学はさて置くとしよう。私はこれから町長と会合がある。お前達は町の中を散策すると良い。」
「よろしいんですか？」
「うむ、ただ、天かける道や海には入らぬようにな。それを守れれば、自由にすると良い。」
そう言い残して、父上は町長と思しき人と共に間借りしている宿屋へと入っていった。
残されたのは、私とお姉様の２人。護衛のアマゾネスも、パロという町の治安を信頼してか、町の入り口で警備しているだけ。私達に気を遣ってくれているらしい。
「じゃあリリィ。私は雑貨屋さんを見てくるけど、貴女はどうする？」
「ん～、散歩する！」
「余り遠くへ行かないようにね？」
「はぁい！」

やはり初めての町ということもあって、私は舞い上がっていたのだろう。お姉様の警告も話半分に、人々が賑わう市場へと駆け出していった。

市場は、私にとってまるでおもちゃ箱のように輝いていた。
船によって運ばれてきた交易品が、石造りの広場に所狭しと並べられ、それを買い求めんと人々がごった返していたのだ。
新鮮な魚介類
異国の野菜や穀物
保存が利くように燻製にした肉
城では見ることが出来ない、初体験の数々。
お小遣いに５０ルクほど貰っていたから、何かしらを買ってみたいという気分に駆られながら、私は市場をまるでスキップを踏むように足取り軽く歩いて行く。
「いらっしゃいいらっしゃい！今日は野菜が安いよ！」
「お値打ち品はコイツ！滅多に出回らない代物だ！早い者勝ちだぜ！」

客を引き付けんと、誰も彼もが声を張り上げ、そして轟かせる。それが幾重にも重なって、市場が活気づいていた。

「お！もしかしてお嬢さんが、今日来るって言ってたリリィ様かい？」

とある出店の店主が、私を呼び止めて来た。

見るからに気の良い、中年の男性だ。

「はい！リリィと申します。よろしくお願いします。」

「はっはっ！リース様も大概だが、リリィ様もお堅いねぇ！もっとくだけて下さいよ！」

「で、でも王女として、お淑やかでないと…」

あくまでも私は王女だ。それを忘れない立ち振る舞いをするようにと出立前、じいに口を酸っぱくして言われていた。確かにいくら幼いとは言え、国のトップの血族なのだ。それに相応しい立ち振る舞いは弁えなければならない。

だが、

「そんなもん、後から幾らでも身に付くさ。リリィ様やリース様に年相応の子供らしさがあっても、誰も何も言わねぇよ。」

気付けば周囲の露店から同意の声が上がっていた。

子供らしさ、と言うのは今一つわからなかったけど、それでもここの人達が私を受け入れてくれている事が何よりも嬉しかった。

「よし！初回サービスだ！リリィ様！これ、昼御飯に食べな！」
そう言っておじさんが私に差し出してきたのは、後から知ったのだけど、ハンバーガーという、所謂手軽に食べられるファストフードと言うモノらしい。
ふんわりとしたパンに、輪切りや程よい大きさに切られた野菜を、ジューシーなハンバーグを特製のソースで挟んだ食べ物だ。
その食欲をそそられる食べ物に、私のお腹の虫は、甲高い音を立ててその鳴き声を上げる。
「あう…。」
顔を赤らめる私に、おじさん達は顔を見合わせ、ややあって示し合わせたかのように大きな笑い声が、まるで爆ぜたかのように始まった。
「こりゃいけねぇ。リリィ様が腹ペコで倒れたともあっちゃ、パロにの名が廃るぜ！」
「よし！じゃあコイツも持っていきな！」
「これもだ！」
「これでも食って、大きくなりな！」
ハンバーガーに加え、一人の商人さんが売っている食べ物を私に押しつけるように渡すと、それを皮切りに我も我もと、売り物を私に持たせてくる。
あれよあれよという間に、私の視界は渡されたプレゼントて埋め尽くされていた。

これだけの物を買うお金がないことを伝えて返そうと思ったが、皆が初回サービスの一言でお金と返品を受け取ろうとしなかった。

4歳と言う年には積載過重だろうという量を持って、私はよろよろとよろけながら、やがて埠頭へと辿り着いた。

「はう…お、重かった…。」

グッタリと項垂れながら荷物を置いて、私は堤防に腰を下ろした。

堤防にを打ち付ける波の音

そして腰まで伸びた私の髪を梳くように吹き抜ける潮風が、疲れた身体を癒してくれる。

ローラントの風とは違う、潮の香りを含んだその風は、やはり鮮烈に私の心に刻まれていく。

ここの人々は、とても温かい。

初めて会ったばかりなのに、こんなにも私を受け入れてくれている。もちろん、お父様、お母様やアマゾネス隊のみんなの評判が、＝私となっているのだろうけれど、それでも温かく接してくれることが何より嬉しい。

だったら私は、皆が積み上げてきたこの温かい関係を絶やさず、汚さない様に、私自身が務めねばならない。年を重ねるごとに、そんな自覚が生まれてきていたのは後の話

なのだけど。
「…あれ?」
数メートル離れた埠頭の端に、長い茶髪の人が座っていた。
何をするでもなく、私と同じように堤防に座り、ボーッと海を眺めているだけ。
ただその瞳は、当時の幼い私から見てもヒドく濁ったものだったのを良く覚えている。
私の少し上のお兄さん、と言うべき年齢のその少年は、魔導師のローブを身に纏い、紅蓮のように燃えるような朱のマントを羽織っていたのが印象的だ。
「お兄さん?どうしたのですか?」
気付けば、私は彼に話し掛けていた。
年上の男の子、とあって物怖じしそうなものなのだろうけど、不思議と怖いという感情は浮かばなかった。
いきなり話し掛けられたことで、少し驚いたようだが、ややあって彼はゆっくりとこっちに顔を向けてきた。
「……別に。」
一言、ただボソリと波の音に消え入りそうな声量。
それだけ言うと、再び遥か水平線へと視線を戻していた。

そんな彼の横顔を、当時の私は興味深そうにじっと見ていたに違いない。
なぜなら、城には大人の男性はいても、同年代や少年と言った年齢の男の子はいなかったのだ。
だから、所謂男の子初遭遇だけあって、幼心からの好奇心を抱いていた。
「っ!?」
「お腹、空いてるんですか?」
いつの間にか真横にいた私に驚いたのか、少し飛び退いて、また距離を取られてしまった。
「お腹、空いてたら、一緒に食べませんか?一杯貰ったんですけど、持って帰るのも、食べるのも私じゃ難しいから…。」
そう言って、屋台のおじさん達から渡された食べ物の1つである串焼きを差し出す。
甘辛いタレを絡めた鶏肉を炭火で焼いたことによって、香ばしい食欲をそそる香りが漂っている。
その匂いに刺激されたのか、私とは違うお腹の虫がキュルルル…と2人の間に響いた。
自覚があったのか、目の前の男の子の顔は羞恥で見る見る赤くなり、ゆでたタコのようになってしまった。

「い、今のは違…っ」

言い訳しようとする彼の口に、串焼きを押し込んでやった。

渡されてからそこそこの時間が経っていたので丁度食べ頃の温度になっており、彼はなされるがまま、鶏肉を咀嚼し始める。

「…どうですか？美味しいですか？」

「…悪くは、ない。」

やはりお腹が空いていたのか、スイッチが入ったかのように、唯只管に串焼きの肉を頬張るお兄さん。

そんな彼がどことなく嬉しかったのか、私もハンバーガーをパクリと一口齧る。

空腹が良いスパイスとなったのか、いつもと違う美味しさが、私に充足感を与えてくれた。

外で食べる食事もさることながら、同年代の、お姉様以外の子供と食べる食事が新鮮さを加味していたのかも知れない。

串焼きを食べ終えたタイミングで、次は肉饅頭を差し出すと、これまた遠慮気味に受け取って食べ始める。

今思えば、年下の女の子に食べ物を貰う、と言うのが、男のことで恥ずかしく感じていたんじゃないかと思う。

１０分ほど食べ続けて。

３～４品、お互いに食べ終えて、彼は「ありがとう。」とややぶっきらぼうにお礼を言ってくれたのが何となく嬉しかった。

「お兄さんは、パロに住んでるんですか？」

「…いや、今はどこにも住んでいない。旅をしている。」

「へぇ…！凄いですね！まだ子供なのに！」

旅、と言うものが、幼い私からしてみれば、大人のすることと認識していたので、童心ながら輝いた目で彼を見ていたに違いない。

そんな私に、彼は「お前も子供だろ。」と言いつつも、何処か得意気だった。

それに気を良くした彼は、ポツポツと、自身のことを語り始めてくれた。

「俺は…元々アルテナに住んでいた。」

「アルテナって…フォルセナの北にある魔法王国の、ですか？」

「…よく知っているな。そのアルテナだ。」

照れ笑いしながら、お父様、予習感謝します、と内心で礼を言っておく。

「俺は、アルテナで魔法の修行をしていた。アルテナでは、魔法の適性が高いと将来を約束され、王国で好待遇を得られるんだ。」

だが、と彼は言葉を繋ぎながら、やや声のトーンを落とす。

「俺に、魔法は使えなかった。初期魔法である、ホーリーボールやダイヤミサイルはおろか、水のマナの恩恵が強いアルテナであるにも関わらず、アイススマッシュも使えない。…所謂落ちこぼれだったのさ。講師のホセに怒られなかった日は無かったほど、な。そんな俺に向けられるのは、侮蔑や同情、そして、魔法適性のある両親からは失望と軽蔑。それに耐えながらも、毎日練習した。来る日も来る日も。…だが、それは成実することなく、ただ徒労な日々を過ごしていたに過ぎなかった。」

「だから…家出?」

「家出…か。ハッ…まぁ言い得て妙だな。世間から見れば家出なんだろうさ。周りの目が嫌で、ただ逃げ出しただけの。」

私の指摘に彼は自嘲気味に笑うと、自身の右手の平をジッと見つめる。魔法の出せない自身の身体に、ただ苛立ちを飲み込むように。

「アルテナに生まれて、魔法も使えないなら、どうなろうと構わない。だから世界を回って…こうやって放浪の旅をしているのさ。その先で野垂れ死ぬなら…まぁそれまでだったって事だろうな。」

「魔法が使えなかったら、お兄さんは意味ないんですか?」

「そうだ。俺にとって魔法が全てなんだ。そうだった…はずなのに…。」

やはり、魔法を使えない悔しさが、彼の中に溜まりに溜まっていたのだろう。言葉に

することで、それが顕著に溢れ出し、やがてそれは氾濫する川のように、涙として溢れ出てくる。
「お兄さん。」
「…なんだよ。」
「魔法が使えないなら、これからどうやったら魔法が使えるか、聞いてみたら良いんですよ。」
「…聞く？そんなの、誰がわかる？俺自身でも解らないのに…。」
「でも、お父様が言ってました。困ったときの…えっと…なんだったかな……そう！聖都のヘンデル…だったかな…そこの野菜…に聞いたら良いって。」
「はぁ？ヘンデルの野菜に聞く？…何をバカな……いや、待てよ？…聖都ヘンデル…これがウェンデルとすれば…野菜は…司祭？ウェンデルの光の司祭か。」
「そ、そう！それです！光の司祭様！」
　この時の私を思い出す度、やはり自身の浅学ぶりに頭が痛くなってくる…。
「滅茶苦茶な間違いだな…。…だが、光の司祭か。少しは光明が見えた気がしなくはない、か。」
「じゃあ、家出の次の目的地は、ウェンデルですね！」
「家出言うな。…まぁ目的地はそうだが…。」

目的地が決まったところで、彼は言葉を濁す。
どうしたのだろうと私は少し首を傾げるが、ややあって、あぁ！と思い付く。
「もしかして、お金が…。」
「くっ…殺せ…！」
そのセリフ、色々危なそうですけど。
「…ん～、じゃあこれ、お兄さんにあげます。」
自身の指にはめた指輪を外して、彼の手に持たせる。
装備品としての価値は余りないけど、装飾品としての価値ならありそうなそれは、質屋で売ればそれなりの値段で売れると思う。これで船に乗って、ウェンデルの最寄りの港までの路銀には充分なるはず。
「いや…流石にこれは…。」
「いいの！困ってる人がいたら、助けるようにってお父様に言われてるんです。」
あとこれ！と、未だかなりの量が残る町人からのプレゼントを彼に押しつける。
「お腹も減るんですから、これを食べて、元気を出してウェンデルに行って下さい！」
我ながら、私らしからぬ押しで言ったものだとつくづく思う。
困惑する彼は、目を点にしているのがヒドく印象的だった。
「しかし…食べ物に加えて、こんな価値のある指輪、受け取ってしまっては…。」

「私が良いっていってるのに？」
「俺なりの良心の呵責だ…。」
　まぁそう思うだろう。
　幼い私は後先考えず、彼のために良かれとしたことは、彼を困惑させていた。
「…じゃあ、約束です。」
「約束？」
「司祭様に会って、助言を頂いて、それで貴方自身のために何かを成して、それを私に教えてください。それが指輪のお金です。」
「…何かを？」
「そうです。何でも良いです。アルテナに戻るも、他の何かでも。ヤケになるでもなく、何かをやり遂げて。いつか私にそれを教えてくれるなら。」
　我ながら上手い具合に落とし所を見つけたと思う。
　キョトンとしていた彼だが、やがて渡された指輪をしっかり握りしめ、出会った頃とは見違えるほどに強い意志を宿した瞳に変わっていた。
「あぁ。勿論…。この指輪の代金どころか、利子が付くくらいに、俺の武勇伝をいつか聞かせてやる。」
「えへへ、約束、ですよ？」

「あぁ。約束だ。」
幼き日の約束。
それが今なお色褪せず、鮮明に覚えている。
これが、彼と、そして私の分岐点。
「リリィ～!!何処なの～!?」
「あ、お姉様が探してます…。」
堤防から立ち上がった私は、スカートに付いた砂利を軽く払い、足取り軽く駆け出す。
「あ…!」
「それじゃお兄さん!良い旅を!!」
何か言わんとする彼を背に、私を探すお姉様に向かっていく。
これで、彼が生きる意味を見出してくれれば。
そんな思いを片隅に、指輪の件をどう説明しようかと思案する私だった。

それがまさか…

あんなことになるとは思いもしなかった。

そして、前話の数ヶ月前。

「リリィ様。私、紅蓮の騎士ことブライアン！11年前の約束を果たし、貴女の僕（しもべ）となり、そして狗となるため、是非ともお側に置いて頂きたく志願いたします！」
「採用。」←ジョスター王
「何でええええええっ!?!?」
本当に
どうしてこうなった

『風邪は一種の自白剤?』

「へっくち!」
頭が痛い
身体がだるい
寒気がする
ボーッとする
私は今、絶賛風邪を引いていた。
そもそも何故風邪をひいたのか。
それは昨日のお風呂上がりのこと
『さぁ!リリィ様!その濡れた肢体を、私が余すところなく、隅々まで、徹底的に拭いて差し上げます!』
『身体くらい自分で拭けます!』
『ふふふ…リリィ様が逃げ惑うお姿…それもまた眼福…!』
『ひぃ!?』
そんな感じで、長時間ろくに身体を乾かさないままに彼から（全裸で）逃げ回ったこ

とで、ものの見事に風邪を引いてしまったのだ。大体ブライアンさんのせい。
「おいたわしやリリィ様…私めが徹底的に看病して差し上げます。風邪の奴…ゲームオーバーだ、ド外道…！」
「誰のせいでこうなったと…ケホッケホッ…！」
私が横たわるベッドの脇には、この風邪の元凶（ブライアンさん）が椅子に座って、私の額のぬれタオルを時々交換してくれている。
何で彼が私の部屋に普通にいるのかはさて置き、正直看病してくれる人が居てくれるのは嬉しいものだ。
「リリィ様…今、タオルを冷たくしますので。」
そして絶妙なタイミングでタオルを濡らし直して額に乗せてくれる。ヒンヤリとした感覚が何とも心地よく、辛い身体に安寧を与えてくれる。
「…ブライアンさん…。」
「何でしょうか？リリィ様。何なりと…。」
「その…看病して下さるのは有り難いですけど……移りますよ…？」
流石に私の看病をしてくれて、今度は彼が風邪を引きました、なんて後味が悪すぎるし申し訳ない。
「問題ありませんリリィ様。」

そんな私の心配を払拭するかのように、彼は優しい笑みを浮かべる。
この笑顔は…正直私の心臓に悪い。ドキリとさせられる。
「リリィ様から頂けるのであれば、風邪の菌だろうと悦んで受け取ります。」
…ここは、キュンとする所なのかな?
「私は、リリィ様が壮健で居て下さるなら、我が身は粉になろうとも問題ありません。ですので…。」
「そんなこと、言わないで下さい…!」
彼の自分の身を省みない発言に、私は身体のだるさや諸々を忘れて勢いよく起き上がる。正直なところ、辛い。でも今の彼の発言は、それをはね除けるほどに私を突き動かした。
「貴方が傷ついてまで…喪ってまで、私はのうのうと生きたいと思いません…!ブライアンさんがこうして一緒にいてくれて…それで私は良いんです…!だから…私さえよければ、自分はどうなっても良いなんて…絶対…言わないで下さい…!」
「リリィ様…。」
「貴方が居なくなっては…私は…。」
あれ…?
どうしたんだろう…?

普段口にしないようなことが次々と…。
これは…風邪を引いて、意識が朦朧として、言葉の判断が付かないのだろう。
うん、きっとそうだ。
そしてこの涙は…目の汗なんだ。
「申し訳ありません、リリィ様。」
そっと、私の左の下瞼に何かが沿い、溢れる涙を拭い去る。
それが、ブライアンさんの指であることに気付いたのは、右の下瞼も拭おうとしたときだった。
「少々無神経でした。リリィ様を大切に思う余り、ついあのような発言を…。」
「本当ですよ。…重罰に値します。」
「重罰…謹んでお受けいたします。」
そう、重罰。
自分の身を省みない、望まない自己犠牲を、私は罰する。
「じゃあ…ギュッて…してください…。」
「…は？」
「ギュッて…抱き締めて下さい…。それが私からの罰、です。」
え？

私、何を言って…?
いやいやいやいや…こんなのおかしいよ。
風邪のせいで変な方向にはっちゃけてて…
べ、別に本心じゃないし…!
「これは…重大な罰ですね。」
「…私を泣かせた罪は重いんですっ。…それよりも。」
「わかりました。…では、失礼いたします。」
そして、私を覆う男性特有の太い腕。
その力強さとは裏腹に、優しく、壊れ物を扱うかのようにふんわりと、私の身体を包み込んでくれる。
「これで、よろしいでしょうか?」
「…はい。」
耳元で囁かれるあの声に、私の身体は風邪による熱と共に蕩けそうになる。
脈が迸り、
心臓がその鼓動を壮大に打ち鳴らす。
でもそれが…何処か心地よく、私に安らぎを与えてくれる。
その温もりをもっと求めて、彼の背に手を回して、私はより身体を密着させる。

「…リリィ様？」
「汗、臭くないですか？」
「いえ…リリィ様の香りの総ては、私にとって癒やしでございます。それが例え汗であろうとも。」
「…ばか。」
風邪って、こんなに大胆にさせるものなのかな？
そんな疑問がいつまでも渦巻くのを最後に、私の記憶はここでぷっつりと途切れていた。

「ん……。」
窓の外からの小鳥のさえずりで目を覚ます。
ゆっくりと、重い瞼を開きながら身体を起き上がらせる。
そうだ…私は風邪を引いていたんだ。
でも、昨日のような寒気やだるさ、その他諸々は感じられなくなっており、むしろ身

体か軽い。
「…治ってる?」
どうやら風邪は完治したようで、その喜びに打ち震えようとした…が、
「へ…?」
はらりと、捲れたシーツから覗く私の身体は、一糸纏わぬ、所謂裸…。寝衣などなく、唯々私は生まれたままの姿で寝ていたのだ。
「な、なんで…裸…?」
「おはようございます、リリィ様。」
見上げれば、ブライアンさんがお粥の入っているであろう土鍋を持って立っていた。
「あ、え…その…へ?」
「お疲れではございませんか?夕べは激しく私を(抱き締めて欲しいと)求められていましたので…。」
「あ…あわわ……!」
こ、これって…もしかして…いや!もしかしなくても…!
記憶が無いけど、あの後私は…私は…!
「リリィ様?如何なさないましたか?」
「うぅ……もうお嫁に行けない……。」

羞恥の余り顔を真っ赤に染めた私は、全裸のままシーツを被って引きこもった。

羞恥と、ブライアンさんとどんな顔で話せば良いのかと悩みながら。

『煩悩の矛先』

「リリィ、また槍が下がってるわ。」
「は、はい……！」
今日はアマゾネスの皆と槍術の練習。
隊長であるお姉様の指南の下、アマゾネス隊全員が槍の素振り……というか素突き？をしている。これがもう何百回と続いているので、腕に力が入らないようになり、その得物は徐々に下がってくる。
何もこんなに続けな苦手も良いのでは？と思うかも知れないけど、いつ、何時必要になるとも解らないので、こうして最大限の鍛錬を行っている。王女である私も、護身術として身に付けており、こうして訓練している。
のだけれど…。
「はぁ……はぁ……！」
「ほらリリィ、もう少しよ。頑張りましょう？」
正直、キツイ。
素振り１，０００回は流石に。

腕の筋肉が痙攣してるし、息も絶え絶え。汗が流れ出て止まない。

これをお姉様は日課として熟しているのだから頭が上がらない。

「今日頑張れたら、明日は今日より楽に熟せるわ。だからもう少し頑張って、限界を超えましょう。」

お姉様は存外スポ根の気があるようで、結構根性論を交えた鍛え方だ。あながち間違ってはいないけど、当の本人にとっては苦境の極みである。

チラリと横目に見れば、エリオットがブライアンさんと剣術の鍛錬をしている。ブライアンさん曰く、エリオットは速さに重きを置いた剣術が向いているとのことで、軽い剣を用いて、瞬発力を出す練習。

スゴいなぁ…エリオットもブライアンさんも…。それに比べて…。

「リ〜リ〜イ〜?」

「はひっ!?」

まるで地獄の釜から響くような声に、思わず身体が跳ね上がる。視線を戻せば、目の前にどアップでお姉様がニコニコとしながらこちらを見ていた。でも、顔は笑っていても、目は笑ってないし、何か身体から黒いモヤみたいなものが滲み出てる。

「まったくもう…ブライアンさんに見とれるのも良いけど、まず自分の鍛錬を終えてからにしなさい。」

「わ、わたし、見とれてなんか…！」
「そうでなくても、鍛錬をサボってたら、ブライアンさんに愛想尽かされちゃうわよ？」
私が…ブライアンさんに…愛想を…？
何でだろう…頭を鈍器で思いっきり殴られたような感じになった。
そして胸の奥がモヤモヤする。
「え、えと…リリィ…？」
「はっ!?な、なんでしょうかお姉様。」
「い、いや…何かいきなり放心してたから…。」
「…気のせいです。さぁ！鍛錬を再会しましょう！おりゃぁぁぁっ!!」
ちょっとお姉様や部隊の皆にドン引きされているけど、とにかく今は思いっきり身体を動かして、そして叫びたかった。この胸のモヤモヤを晴らすために。

ふぅ…
ちょっと張り切りすぎたかな…。

頬を流れる汗を拭き取りながら、私は井戸へ向かう。
あれから体力を全て使い果たすつもりで槍を振り続け、結果、息をするのも辛くなる位にグッタリしていた。
そして多量の汗をかいたので、身体が本能で水を求めている。
「おや…リリィ様。リリィ様も水分を?」
先客がいた。
件の彼である。
折角、彼に対するモヤモヤを振り払ったのに、少しぶり返してしまった。
「え、えぇ……流石に喉が…。」
「では、少々お待ちください。」
彼は自身も水分をとって身体を休めたいだろうに、自身のコップを傍らに置いて井戸の水を汲み上げてくれる。
水を汲んだ重たいバケツをロープで引き上げると、新しいコップにその水を注ぎ、そっと差しだしてくれた。
「あ、ありがとうございます…。」
「いえ、これくらい容易い御用です。」
汲まれた水をほんの少し口に含むと、冷たい地下水が喉を潤して、火照った身体を冷

やしてくれた。
「今日の鍛錬、後半はいたく気合いを入れておられましたね。何かございましたか？」
「べ、別に……ちょっと、煩悩を払おうとした…と言うか…。」
「ほう…煩悩…ですか。」
　ほんの少し、彼が煩悩と言う言葉に食いついてきた。その声は若干由々しきものを感じ取ったかのような重苦しさがあった。
「リリィ様に煩悩を振り撒くもの…。些か興味が湧きますね。」
　貴方のことですけど、と頭で思えども口はしない。
　そうでなくても、目の前の彼の状態に嫌な予感しかしないのだから。
「私のリリィ様の思いを釘付けにする羨ま……もとい、罪深き者を、今すぐ見つけて晒し首にして差し上げましょう。」
「え、えぇっ!?」
　瞳孔の開いた目で抜剣する彼は、どう考えても危ない人だ。というか騎士道は何処へ行ったんだろうか？
「さぁリリィ様！罪深き者を教えてください。私がちょっとお話をしてきますので。」
「そ、それは……その…。」
　私が言い淀むと、彼はその身に纏う闘気を滾らせる。目の前でそれに充てられて私は

思わず尻餅をついてしまう。
「あぁ…なんとリリィ様は慈悲深いのでしょうか…、罪深き者を庇っておられるのですね。おいたわしや…。」
「あ、あの…ブライアンさん?」
「はい? 何でございましょう。」
「裁こうとしている本人が、知らずに自分のその怒りの矛先になってたら、その人はどうするんですか?」
「ふむ…そうですね。…切腹でしょうか?」
「せ…っ?」
「切腹…つまり自害です。腹を切り、自らの罪を償うのです。」
「え……?」
「しかし、どうしてその様な問いを…?」
い、言えない……言ったら本気でセップクとやらをしかねない。
「…まさか、私、でしょうか?」
何でこんな時だけ鋭いのだろうか。
ビクリと身体を震わせたことで、それが図星と察されたらしく、彼はややあって抜剣する。

「ちょっ!?ブライアンさん!?」
「離して下さいリリィ様！私はリリィ様の煩悩となってしまった！死してその罪を償います！」
　もうセップクする気満々の彼に必死に抱き着いて、私は必死に止める。もうやだこの騎士。
「騎士道とは…死ぬことと見つけたりっ!!!」

「またあの２人はイチャイチャしてる……ほんとにもう…人目も憚らずに…。」
　遠巻きに私は、井戸の傍でスキンシップ（超勘違い）をとる２人を、微笑ましく見守っていた。
　あれだけリリィを思ってくれているのに、どうしてあの子は素直にならないのかなぁ。
「…ちょっと、羨ましいなぁ。」
　何処かに、あそこまで私を一途に思ってくれる素敵な男性はいないかな…そんな思い

が、私の頭に過った。

『泳ぎに行こう！』

「海だーー！」
「ヒャッホォイ！」
いつもの露出の多いアマゾネス隊服を脱ぎ捨て、これまた局部と胸部を覆い隠すだけの布地（水着）に身を包んで、隊の皆は青々とした海原に向かって焼け付く白い砂浜を駆け出していく。
季節は夏
私達は今、天かける道の麓の砂浜に水練という名の海水浴に来ていた。

遡り数日前。
「ほらリリィ、矛先が地面にこすれているわよ。」
今日も今日とて槍の訓練。
前回に比べて熟せるようにはなったけど…

けど…

「あ…暑い…。」

「言わないで下さいリリィ様…余計暑くなります。」

ギラギラさんさんかんかんと射して降り注ぐ太陽光が、私達の肌を焼き尽くさんと照らしてくる。

うだるような暑さが、皆の体力を奪っていく…。

「…あれ…お母様…?」

「え、リリィ…?」

「お母様が…川の向こうで手を振ってます…」

「ちょっ!?」

にこやかに私を呼ぶお母様。

私は川の畔にある船に乗り込んで、いざ出航…と言うタイミングで、船は転覆してしまう。

「ダメよリリィ!そっち行っちゃダメ~!」

「はっ!?」

お姉様からの張り手で、私は再び炎天下に戻された。

ほっぺたがじんじんするけど、暑さのせいでさほど気にならなかった。

「ふむ…リース様。この炎天下の中では、些か皆様の集中力が散漫になっているので、訓練の効率も落ちています。」
「そうですね…どうしたものでしょうか。」
　ブライアンさんの提言でお姉様も悩む中、熱心に素振りをしていたエリオットがふと剣を止めて挙手した。
「お姉様、本で読んだのですが、泳ぐという行為は、全身の筋肉を使用して効率よい鍛錬にもなりますし、呼吸法の練習にもなるとありました。」
「泳ぐ?」
　私も、お姉様もブライアンさんも、首を傾げた。
「はい。それでこの季節ならば海に行くことで涼もとれて、全身鍛錬が出来る。この暑い時期にピッタリの訓練だと思うのですが…。」
「流石エリオット王子!」
「考えが柔軟!」
「素敵!抱いて!」
　エリオットの提案に、アマゾネス隊の皆が賛成と食いついてくる。まぁ確かに魅力的な提案だとは思うけど。
　というか誰ですか最後の人は。

エリオットを抱くなんて許しませんよ。
「そう、ですね。このままだと士気にも関わりますし。かと言って城を留守にも出来ませんので、アマゾネス隊を二班に分けて二泊三日の水練を行いましょう。」
『ヒャッホオオオオイ!』
…皆現金です。予定が決まった途端にハイテンションになってます。
……ですが。
「……海、かぁ…。」
ちょっぴり、憂鬱。

海なんて何年ぶりだろう。基本的にローラント城周辺で生活を済ませている私達にとって、海はスゴく見慣れないものであって、とても新鮮だった。
隊の皆は我先にと、まるで下山の疲れなど感じさせないほどに元気なものだった。
「皆!準備運動を忘れてはダメですよ!」

が、やはりお姉様は真面目に隊長として皆の統率を図る。確かにいきなり泳いだりしたら、足がつったりしてとても危ないし。

飛び込もうとした皆はお預けを食らったかのような犬のようにしょんぼりしながら、渋々というようにえっちらおっちら身体を解し始める。

「すいませんブライアンさん、パラソルとかの設置をお任せしてしまって。」

「いえ。このような重労働は、私のような男にお任せください。」

でもこの短時間で来ている人数に合わせての数を設置しているのだから、どれだけ効率よく熟したのだろう…。

「それにしても…相変わらず見事な肉体ですね。」

「本当です!僕もブライアンさんのような強い身体になりたいです!」

「それほどのものでしょうか?そうだとしたら、日々の訓練の賜物でしょう。」

そう、今のブライアンさんは、トランクスタイプの水着1枚であり、その鍛えられた肉体を惜しげもなく披露しているのだ。

見事に割れた腹筋や、ガッシリとした二の腕や足。かと言って暑苦しさは感じられず、唯々逞しく、その整った顔つきも相まって女性受けしそうな身体付き。

アマゾネス隊の皆は例に漏れず、私も正直一瞬見惚れてしまっていた。

エリオットもエリオットで、幼いながらもそれなりにしっかりした身体付きになって

いるし、これも日々の訓練の恩恵なんだろう。
「ほらリリィ。そんなところで覗いてないで、出て来なさいな。」
「う、うぅ…。」
目の前には整った逞しい身体をしたブライアンさん。
そして美しいボディラインを緑のビキニで包んだお姉様。
正直、私は2人に比べて…
「やっぱり…無理ィッ!!」
「あっ！リリィ！」
見比べて劣っている私は、羞恥のあまり岩場の影から飛び出すと、踵を返して砂浜から全速力で逃げ出した。
「…あのタオル塗れの人型が…リリィ様？」
「…はい。恥ずかしいって…タオルで身体を隠して来てたんです。」
そんな2人のやり取りを耳に遺しながら。

「うぅ…ぐすっ…やっぱりダメです…。」
私はタオル人間のまま、バロの宿屋の隅で蹲っていた。
恥ずかしさのあまり逃げ出してしまい、こうして人目に触れる事もなく、唯々時間が過ぎるのを待っていた。
今更だろうけれど、でもやっぱりこんな身体付きを人目に曝そうなんて…。
「……着替えよう。」
そうだ、水着。
もう着替えて…こんな気分とはサヨナラしないと。
そう立ち上がったとき。
「リリィ様、こちらにおられましたか。」
ビクリと身体を震わせた。
一番聞きたくなかった声、一番見つかりたくなかった人。
「リース様が心配しておられました。戻りましょう。」
「わ、私は…行きたくないです。」
「???どうかされましたか?体調が優れないのですか?」
「い、言いません!」
こんな理由で行きたくないなんて解ったら、きっと笑われる。そんなの、絶対嫌だ…。

「体調が優れないのでしたら、そのようなタオルをお取り下さい。熱が籠もり、熱中症になりかねません。」
そう言うと彼は、私が身体を隠しているタオルに手をかける。
「ちょっ!?」
「申し訳ございません。ですが、ここは強引に行かせて頂きます。」
「きゃあっ!?」
抵抗も意味なく、あっという間にタオルは引っ?がされ、私の身体は空気にさらされる。少し汗ばんでいたので、ヒンヤリとした空気が私を刺激する。
「う、うぅ〜…!」
見せたくなかった私の身体。
お姉様に比べて凹凸の少ない身体付き。
そして何の変哲もない、白のビキニ。
そうでなくてもアマゾネス隊の皆と比べても見劣りするそれを見せたくなくて、タオルで隠していたのに…。私は思わず身を庇うように手で胸元を隠してしまう。
「……。」
ほらブライアンさんだって言葉を失ってる。
…幻滅、されたかな…。

「はっ!?…申し訳ございませんリリィ様。」
「…なんでブライアンさんが謝るんですか。私の方が謝らなきゃダメなのに…。こんな身体…。」
「何をおっしゃいますかリリィ様…。私が謝る理由…それは仕える私が、貴方に見惚れてしまったからに過ぎません。」
　見惚れた?
　こんな身体に?
「嘘、着かないで下さい。」
「天地神明に誓い、嘘偽りはございません。」
「お姉様の方が、女性らしい身体付きなのに。」
「確かにリース様は他の男性から見れば美しい方です。しかし、私にとってはリリィ様が美しいと感じたから見惚れたに他なりません。」
　そう言うと彼は、私の目線に合わせるように膝を着き、そっと手を取ってくる。
「私の言う美しさ…それは貴女様が幼き日の私を救ってくれた、その心と想い、それに御身が合わさり、それが私の中で何よりも神々しく輝いているのです。それは何者にも否定は出来ませんし、させません。」
「あ、あんな小さい時のことを今言わなくても…!」

「あの時の事がなければ、今私はここにはおりません。その尊き心…それこそが私がリリィ様をお慕いする根元なのです。」

な、なんでこの人は歯が浮きそうな甘ったるいことを、まるで息をするかのように言うのかな…!?聞いてて恥ずかしくなってきた…。顔、絶対赤くなってるよね…?

「だからリリィ様…その様に御自身を卑下なさらぬよう。私の敬愛する姫君は、少々謙遜が過ぎるように思えます。」

「うぅ……も、もう勘弁してください…。」

さっきとは別の意味で恥ずかしすぎて…もう死んじゃいそう…。

「なのでリリィ様。皆と共に海を堪能いたしましょう。それに…お身体の事を気にされるのであれば、まだ希望はあります。」

「…希望?」

「ええ。」

希望

とても惹きつけられるその二文字。

それを彼は夏の太陽に負けないほどに眩しい笑顔でこう言った。

「リリィ様はまだ15歳、十分これからの成長の余地はございます。」

気休めになるのかならないのか解らない希望だった。

「その為にも、健康的な状態を保つに越したことはありません。」
「ふぇっ!?」
いきなりだった。
持っていた手を引き寄せると同時に、もう片方の手を肩に回され、思いっきり抱き寄せられた。
今私の耳元には、彼の胸筋ががががが…!
「失礼いたします。」
そして流れるように手を持っていた方の手を膝裏に入れて、横抱きにされる。
こ、このシチュエーションからこれは正直…女の子として嬉しいけど…恥ずかしいというか…。
「皆のところへ戻り、共に海を楽しみ、泳いで下さい。リリィ様が楽しんでくれれば、私は何も要りません。」
「ブライアンさんは…どうするんですか?泳がないんですか?」
「……私は、皆様が楽しまれているのを見守っているだけで、十分でございます。」
何だろう今の間は……。
…もしかして。
「もしかしてブライアンさん……泳げない、とか?」

「……。」

図星っ!?

「も、申し訳ございません。そ、その…水面に浮く…と言うのはどうしても出来ないもので…。」

「ふふっ…!意外です。ブライアンさんにも苦手なものがあったんですね。」

「私とて人間です。苦手なものの1つや2つございます。」

ブライアンさんの弱点…ちょっと予想もしていなかったけど、何だか彼を少し知ることが出来た気がする。そう思うと嬉しくて、自然と笑みを浮かべてしまった。

「じゃ…泳ぐ練習、しましょうか?」

「い、いえ、私には皆様を見守ると言う重大任務が…。」

「物は試しです!さぁ、行きましょう!」

「…はい。」

いつもとは攻守反対だけど、でもたまにはこう言うのも悪くないなって感じた。

それと…

ほんの少し、自分に自信が持てるようになれた…そう思う。

だから、

ありがとう、ブライアンさん。

『泳ぐ練習をしてみよう』

「ほら、ブライアンさん、しっかり力を抜いてください。変な力を加えるから沈むんです。」
「おぼぼぼ…！」
浅瀬で私はブライアンの泳ぎの練習に付き合っていた。私でも充分足が着く位の場所で先ずは浮く練習をしているわけだけど…
「ごほっ！ごほっ！」
目の前では思いっきり海水を飲んでむせ込むブライアンさん。
さっきから何回か浮こうと試みて、ものの見事に全て海底に沈んでいた。
「も、申し訳ございません。リリィ様にご教授頂いているのにこの体たらく…何と情けない…。」
「気にしないで下さい。ゆっくり行きましょう？」
何でもそつなくこなして、
強くて、
ストーカーの彼にこんな弱点があったなんて、何だかちょっと安心してしまった。

「やっぱり溺れるのが怖いのか、身体が曲がってますね。ちょっとお手伝いするので、もう一回やってみましょう。」
「は、はい…。」
もう一度浮いて貰おうとすれば、やはり溺れることを恐れて足が沈みかけている。だから身体が浮かばずに沈んでしまうという悪循環に陥っている。
だから…
「私が浮けるようにお腹の下から持ち上げますから、意識して身体を伸ばしてみて下さい。」
そっと、彼の身体を下から持ち上げる。浮力が働いているので、ブライアンさんの体重でも私の筋力で充分持ち上げられる。
水の中で彼の腹筋に触れた。
ガッチリしたその筋肉は、逞しさと共に頼もしさが感じられるもので、思わずドキドキしてしまう。
さっき（前話）で胸筋に触れたときもそうだけど、普段の彼は厚いローブか、騎士鎧を身に纏っているため、その身体付きが窺い知れなかった。
でもこうして改めて彼の身体を見て、触れることで、胸の奥がドキドキしてきてしまうようになった。

私は…おかしくなってるのかな…。
「リリィ様？」
「……ぇ？あ、何でしょう？」
「いえ、何処か上の空の様に見えましたので…。体調が優れないのでしょうか？」
「そ、そう言うわけじゃないです。私はいつも通り、元気ですよ？」
ちょっと砂浜に座って2人で休憩しているとボーッとしてたみたいで、ブライアンさんに心配かけてしまった。
私が支えることで、ブライアンさんの浮き方はだいぶ自然体になってきていて、この分だと今日中に泳げるくらいになりそうなくらいになってきていた。
やっぱり運動神経が良いのだろう。
私なんか中々泳げるようにならなかったのになぁ…。
「そういえばリリィ様。」
「なんですか？」
「今日は日差しが強うございます。まだリリィ様は日焼け止めを塗っておられない御様子。このままではリリィ様の美しい環のお肌が黒く焼けてしまいます。」
「まぁ…確かに…焼けちゃいますね。」
「ですので、泳ぎの稽古を付けて頂いたお返しに、日焼け止めを私が塗らせて頂きます。」

「えっ？でも…それは…。」

つ、つまり、それって、ブライアンさんが私の背中とか足とかを触るってこと…だよね？

「リリィ様のお肌の健康を思うが故でございます。」

私の返事を聞く前に彼はテキパキとレジャーシートとパラソルを設置して、日焼け止めを塗る準備をしている。…何処から持ってきたんだろう？

「ではリリィ様…俯せになって下さい。」

そういう彼の顔は、まるで今の太陽よりも眩しいくらいの笑顔で満ち溢れていた。

「そ、その…やっぱり自分で…」

「塗らせて…頂けないのでしょうか？」

断ろうとすれば、まるで捨てられた犬のようにシュンとなっていく。

いや、普段から自分を狗と言ってるから、あながち間違ってはいないかな。

でも流石にこんな表情をされては私もキュンと…いや、罪悪感に駆られてしまう。

「じ、じゃあ…お願い、します…。」

こんなにすんなりと意見を変えてお願いする私は、世間から見ればチョロいのかな…。

俯せになった私は、ドキドキが激しくなる。

そして視線から彼が消えたことで、それはより顕著なものへと変わっていく。
「では、失礼しますね?」
頭の後ろの方で粘液がねちゃねちゃと、何やらいやらしい音を立てており、私は思わずツバを飲み込む。
いつ来るのか解らないその感触に身構え、ややあって…
ヌルリ…
腰に、何とも表現しがたいその感触が訪れた。
「ひゃあん!?」
身構えていたとは言え、普段味わうことのない、そして慣れないその感触は、私の身体を跳ね上げさせるには充分だった。
「失礼しましたリリィ様。しかし今しばらくの辛抱でございます。」
彼はそのまま粘液状のそれによるぬめりを、皮膚に馴染ませるように塗り込み、そして滑らせていく。
そして、ぬちゃ…ねちゃ…という音が、波の音が静かにさざめく砂浜にいやらしく響き渡る。
「ん…ぁ……は……う…っ…。」
それに伴い、私も声が…しかも自分で言うのもアレだけど、何かやたら艶めかし気な

声が漏れてしまう。ブライアンさんに聞かれないように堪えているのに、私にとっては刺激が強すぎた。

さらには、ブライアンさんの指や掌…それもマメが潰れて新しくできた硬い皮膚が、絶妙な刺激のアクセントと化しているので、背筋に触れる度に少し身体が跳ねてしまう。

正直…予想してたよりも…うぅん、遥か上の刺激力だった。

「ふむ、背中や腰はこんな感じで良いでしょう。」

…へ？背中と腰だけでこんなに？じ、じゃあ…お尻とかに塗られたら…どうなっちゃうんだろう？

そんな好奇心から来る期待と、未知の感覚に対する不安が私の中で葛藤する。

「ちょ……ちょっと…ブライアンさん……やす、ませて……」

何とか捻り出した言葉。息も絶え絶え、流石に連続してされたら、身体が持たない。私の言葉が通じたのか、彼は手を止めてくれた。

「も、申し訳ございません。リリィ様。少々悦に入っておりました。」

「…悦？」

「リリィ様の環のお肌に直に触れられる、それが溜まらなく私にエクスタシーを与えていたのです。やはりリリィ様は、私にとって魅力的過ぎる女性であるという証左でござ

いましょう。」
　これは…照れるところなのか怒るところなのか…。その…魅力的って言ってくれるのは…嬉しいんだけど。
「では、そろそろ続きをさせて頂きます。」
　そう言うや否や、私の返事を聞く前に彼は、脹ら脛や太股を揉みながら塗っていく。
　こちらは先程とは違い、まるで揉みほぐすかのような塗り方になっており、所謂マッサージのようだった。
　天かける道を下って宿屋に入り、そのままの足で海に来たのだから、知らず知らずの内に凝っていたようで、心地よい彼のマッサージに身を委ねていた。

「寝てしまわれましたか。」
　余程疲れておられたのか、リリィ様は日焼け止めを塗っている途中で寝てしまわれた。
　流石にこれ以上刺激して起こしてしまうのも憚られるので、そっとその場で中断して

おく。

さざめく波と、さんさんと降り注ぐ太陽。

パラソルの影で、健やかな寝息を立てるリリィ様は、やはり私にとっては天使だった。

「良い夢を、リリィ様。」

普段のように奉仕をさせて頂くのも愉悦だが、こうしてリリィ様と穏やかな時を過ごせるのもまた至福。

緩やかな時の中で、リリィ様が目覚める夕方まで私は唯々彼女の寝顔に魅入っていた。

『下着泥棒と変態』

「きゃあぁぁぁっ!!!」
　城内に響き渡る大声。
　この可憐で麗しくて耳に甘く劈く声は…！
「リリィ様！ご無事ですか!?」
「あ…ブライアンさん。」
　そこには既に、姉上であるリース様と侍女が既に駆け付けていた。くっ…私が一番ではなかったか…！
「先程のリリィ様の悲鳴は一体…!?」
「その…ね、泥棒が現れたみたいなのよ。」
　リリィ様はショックを受けているらしく、代わりにリース様が答える。
「泥棒…!?リリィ様の部屋に…!?」
「えぇ…その…それが仕舞ってある所を見たら…ごっそり減っていたって。」
「ごっそり…!?一体何を…!?」
　何を…なにを盗んだというのだ盗っ人め…！

「そ、それが…。」
「それが？」
随分じれったい。
ただでさえリリィ様の私物が盗まれたというのに…！この焦れったさが私のイライラに拍車をかけてくる。
それを察したリース様は、少し戸惑いながら口を開く。
「パ……イ…です…。」
「…パ…なんですか？」
「だ、だから！パンティーです。」
「パンティー？パンティーとは…女性が下半身に纏う、所謂下着のアレでしょうか？」
「そ、そうです！」
つまりアレだ。リリィ様のパンティーが盗まれた…所謂下着泥棒に遭ったと、そういうことか。
「堪忍袋の緒が切れた。許さんぞ。」
「…ブライアンさんは…盗ってませんよね？」
ボソリと、消え入りそうな声でリリィ様が尋ねる。
「私は盗む等という下劣な行為は致しません。」

「で、ですよね。」
「はい。私はリリィ様のパンティーを愛でることはあっても、持ち出す等という行為は決して…」
次の瞬間、私は窓から投げ飛ばされていた。

翌日から私はリリィ様の部屋が見える離れの塔から見張っていた。
恐らく犯人は、また盗みを働くために夜な夜なやってくるに違いない。
そしてそれは、1週間後に起きた。
「ヌッ！」
闇夜に紛れて人影がリリィ様のお部屋のベランダによじ登っている。
どうやら現れたようだ。
私は塔から飛び降り、城壁を駆けて可及的速やかに駆け付ける。
このままでは、リリィ様のパンティーが盗っ人の毒牙に晒されてしまう。それだけはならない。

しかし、奴は手慣れていたのか、私が駆け付けたときには既に下着を回収して袋に詰めて持ち出そうとしていた。
何という下劣な…！あんな雑に詰めていては、折角のパンティーの形が崩れてしまう…！
「待てィ！」
「ヌッ!?」
私が呼び止めることで、奴は驚いて足を止める。よもや見張りに見つかるとは思わなかったようだ。
「リリィ様の神聖なパンティーを盗もうなどと…言語道断！リリィ様の騎士である私が、貴様を断罪する！」
「何が騎士だ！相手にしてられっか！」
一瞥すると奴は場外を目指して駆け出す。
ここで逃がすわけにはいかん。
私も身体能力を駆使して追い掛ける。
流石にただの盗っ人ではなく、鍛練を積んでいる私が追い掛けても、差が縮まることなく、拮抗していた。
「ブライアンさん！」

私の声がリリィ様の安眠を妨げてしまったらしい。
私の背に愛おしい声が響く。
「御安心くださいリリィ様！私ブライアンが必ずや、奴の首級を差し出します！」
リリィ様の声が追い風となり、私は加速する。
少しずつ、少しずつ距離が縮まっていく。
「だぁぁっ！しつこい！」
追い付かれると察したのか、奴は盗んだ袋から何か取り出し、私の顔目掛けて投げ付けてきた。
「うぶっ!?」
追い付くことに専念していた私は、避けきれずにそれをまともに受けてしまう。
「へへっ！あばよ！」
怯んだ隙に、奴は私との差を広げていく。
何と情けない…！
奴の投げ付けてきたものを握り締め、一体何が私を妨げたのかを見遣る。
それはシルクの肌触り。
それは愛らしいフリルがあしらわれたもの。
それは持ち主を体現するかのような、純白の逆三角。

「こ・れ・は!?」

リリィ様のパンティーだ。

よもや盗んだものを投げ付けて来るとは思わず、驚きと共に、何故か私は好奇心に満たされた。

先程投げ付けられて顔に命中したとき、何故か私は一瞬昂ぶりを感じた。それは血が全身を駆け巡り、何かが解放されると言う感覚。

恐らく私が、リリィ様のパンティーを愛でる根源そのもの。

私を誘って止まない、パンティーのクロッチ部に鼻を押し当てる。

匂いを嗅ぐ。

ぞくぞくと、全身が…細胞一つ一つが震えた。

私はこれを求めていた…!

そのまま私は、

パンティーを、

被る…!

「フォォォォォッ!気分はエクスタシー!!」

思わず雄叫びをあげた。

私という存在が、

まるで違う何かに生まれ変わるようだった。
身体が熱を帯びる。
鼻から肺に入り込む素晴らしき香りが、私の全てを燃やす！
もはや…この身1つが1つの兵器！
「クロスアウッ!!」
邪魔な拘束具となる服を脱ぎ捨て、私は裸体（ブーメランパンツ残し）をさらけ出す。
なんと清々しい…！
この世の真理が見えるようだ…！
今の私ならば…！
「今、成敗する！」
普段の私より遥かに向上した身体能力を駆使して跳躍。遥か上空へと跳ぶ。
「逃がさん！」
私は上体を反らし、足首を掴む。
遥か下方には、私を振り切ったと確信している下着泥棒。私の身体は吸い込まれるように奴へと落ちていく。
「ゴールドパワーボム!!」
「ぎゃあああっ!!」

股間を奴の後頭部に打ち付けるように体当たり。奴は前のめりに倒れ込み、石畳に顔面をこすりつけながら滑る。私は絶妙にバランスをとりながら、止まるまで股間を押し当てていく。

「成敗っ！」

「するかぁぁっ!!」

まだお仕置きが足りなかったようだ。

顔をボコボコにしながらも元気に起き上がる奴は未だ抵抗の意志があるのか、手投げナイフを構えて立ち上がる。

「畜生……！なんだよさっきの…！頭に生暖かくて柔らかいものが当たってたし…！」

「それは私のおいなりさんだ！」

「なん…だお前!?」

「貴様に名乗る者ではない！犯罪者め！」

「お前の方が見た目犯罪者じゃねーか！」

失礼な…！私はただリリィ様の神聖なパンティーを頭にかぶり、下はブーメランパンツ。それだけなのに、何が犯罪者なのか。盗っ人猛々しいとはこの事だ。

「私は貴様を捕縛する…それだけだ下着泥棒！」

「くそっ！こんな変態に捕まったとあっちゃ、末代までの恥だ！」

奴は決死の抵抗で両手に持ったナイフを投げ付けてくる。
普段の私ならば、避けるだろう。
しかし今の私は全てにおいて普段の私を凌駕している！
「あたっ！」
私のパンツの両脇を伸ばすと、股間が締められて実にエクスタシー！それにより私は更なるパワーアップを果たす。
そしてそれを超高速で振り回し、鋭利なナイフの全てを打ち落とす。
「なん…だと……」
「さぁ！降参して大人しくお縄につけ！下着泥棒の変態め！」
「お前の方が明らかに変態だろーが！」
「あくまでも抵抗するか…！ならば！」
私はパンツの両脇を交差して肩に掛ける。
君達に最新情報を公開しよう。
私は肩にパンツの両脇を掛けることで股間が常時締められて、常に最高のパフォーマンスを発揮することが出来るのである！
そして、股間に隠したロープを取り出し、奴に投げ付ける。
だが、ただ投げ付けるのではない。

「フッ！ハッ！」
流れるように身体が理解している動きで縄の軌道を操る。
「な、なんじゃこりゃぁぁ！」
さすれば瞬く間に亀の甲を模した縛り上げ…所謂亀甲縛りの完成だ。
だがこれではまだお仕置きにならない。
「とう！」
私は飛び上がり、せり出した金具に縄を引っかけて飛び降りる。そうすれば物の見事に下着泥棒は手足を釣り上げるように宙吊りになり、正にシャチホコ状態だ。
そして、私は余った縄を持って、奴の真下に仰向けでスタンバイ。
「必殺…地獄のバンジージャンプ」
私は縄を持つ手を緩める。
そうすると下着泥棒は真下に下降…私の…それもおいなりさん目掛けてやって来る。
「ぎゃあああっ！」
奴は悲鳴をあげる。
だがこれはバンジージャンプ。
私のおいなりさんにダイブする数センチ前の所で縄を引いて止める。
そして再び縄を引っ張り上げて奴をつるし上げ…

「ひぃぃぃぃ!!」
再びバンジー!
そして触れる寸前で止める。
このお仕置きの恐ろしいところ、それは触れるか否かの所を繰り返すことで、恐怖心を煽るのだ。
そして、私の匙加減…もとい、縄加減でいつでもダイブさせられるという、殺生与奪を委ねられた状態だ。
「もう止めてぇぇぇ!!」
私のお仕置きは、夜明けまで続いた。

中々帰ってこないブライアンさん。
お姉様は休んで待っているよう言われて待って、翌朝…。
犯人は縄で捕縛されていた。何だか卑猥な縛り方で宙吊りにされて。
そして、盗まれたものは返ってきたけど、私のお気に入りのパンティーが1枚行方不

明になっていた。

ブライアンさんはというと、まさかの不覚をとって気絶していたとか。

一体私のパンティーは何処へ行ったのか…謎のままである。

『御奉仕されるのも悪くない』

今日の日課を終えて、私は宛がわれた部屋に戻る。
今日はエリオット王子の鍛練にリリィ様への御奉仕、リース王女の稽古相手にリリィ様への御奉仕、アマゾネス隊の備品チェックにリリィ様への御奉仕…。
私がローラントに来て早6ヶ月…。もはや慣れたものだ。最初こそ余裕がなく、少し苦戦していたが、今は猶予を持って終えられるほどになっている。
ともあれ、流石に働き詰めだったようで、先程ジョスター王より明日一日の休暇を与えられた。…確かに最後に一日休んだのは何週間前だったか…。心なしか身体の節々が重い気がする。
ともあれ、明日一日に余暇が出来てしまったので、どうしたものかと悩みながら部屋の扉を開く。
明日のことは明日考えよう。
そう決意しながら私は部屋へと…
「お、お帰りなさいませ、ご主人様。」
天使がいた。

ロングスカートタイプのエプロンドレスに、頭に純白のヘッドドレス。金糸のような滑らかな髪が黒のエプロンドレスに恐ろしいくらいに似合っていた。
この世の物とは思えないほどに。
ここは、天国か。

【遡り数時間前】
私、リリィは考えていた。
ブライアンさんのストーキングという名の御奉仕に、どう仕返しをしようかと。
今日も鍛練を終えて水浴びした私に、「新しいお召し物です。」と下着やら何やら一式を、水浴び場に持ってきていた。
しかも全裸の私に。
これで何度裸を見られたのか解らない。
もう数えるのも嫌になってくるくらい。

「ぐぬぬ…！どうしたらあの人をギャフンと言わせられるのか…！」
幾度となく裸を見られた私の中で、リベンジの炎が燃えたぎっていた。
『聖剣伝説３　ＴＲＩＡＬＳ　ｏｆ　ＭＡＮＡ　逆襲のリリィ』
始まります。

とりあえず、お姉様に相談してみた。
「え？ブライアンさんの奉仕のお返しがしたい？」
…若干意図が違うような気がしなくもないけど、大体合ってるから良いかな。
「うーん、そうね。……じゃあ逆にリリィがブライアンさんの御奉仕をしてあげたら良いんじゃない？」
「私が、御奉仕？」
「そう！いつもして貰ってるんだから、逆に奉仕してあげれば彼も喜ぶわ！きっと！」
私、喜んでいるわけじゃないけど。
ともあれ、お姉様の案も悪くないと思い、侍女に頼んで制服（メイド服）を貸して貰った。
ちなみに、
一番小さな侍女の物を借りても大きかったので、倉庫に眠っていた最小サイズを着る

ことになったのはここだけの話。
そして、彼の部屋で私は待つ。
フフフ…どう御奉仕しようかな?
いつもいつもいつもいつもいつもいつもいつもいつもいつもいつもいつも
勝手に部屋に入って、
お風呂に入ったら着替えを持ってきたり、
身体を洗おうと突撃してきたり…!
これを機に、いつも私がどんな気持ちなのかを思い知らせてやります…!フフフ…!
そして…
扉は開け放たれた。
「お、お帰りなさいませ、ご主人様。」
考えていた出迎えの辞と、よもや私が部屋に入っていたことが面食らったようで、目を丸くして固まっているブライアンさん。
フフフ…ちょっと恥ずかしいけど、第一段階は概ねせいこ…
「リリィ様!」
ガバッと、勢いよく抱き着かれた…!
「えっ?えっ?」

「あぁ…リリィ様、大変愛らしゅう御座います！
ロングスカートのメイド服…
芸術品と思しきリリィ様の髪…
リリィ様の小柄な体躯…
それらが渾然一体となり、まさにこの世の奇跡と呼ぶに相応しい…！」
「あ、ぁぅぁ……！」
ぎゅぅっと抱き締められて、私の方がガチガチになってしまっている。
さらに密着していることで、彼から男性特有の匂いがダイレクトに伝わってきて、頭をクラクラさせていく。
そして勢いそのままにグラリとバランスを崩して後方へ倒れ込む。
そのまま床に倒れていたら危なかったけど、ベッドだったから怪我はない。
けど、別の意味で危なかった。
抱き締められたままベッドに倒れ込んだから、当然私と共にブライアンさんも倒れてくる。
つまり今、私はブライアンさんに覆い被さられる様にベッドに倒れているのだ。
「ぶ…ブライアンさん…？」
男の人にベッドへ押し倒される＝これからめくるめくオトナの時間を体験するだろ

うという予想を、私は幼いながらに彷彿できた。
高まり、早まる鼓動。
紅潮していると解る顔。
これから私は、オトナの階段を上るシンデレラになるのだろうか？
そんな大きな不安と、ほんの少しの期待。
だがそんな淡い想いは、すぐさま崩れ去る。
「くぅ……くぅ……。」
「へ…？」
耳元で聞こえるのは、安らかな寝息。
横目で見遣れば、ブライアンさんは私を抱き締めながら目を閉じて寝ていた。
思えばブライアンさんは私が起きている時は大抵起きていた。それに休暇を取っている所なんてここ数週間見なかった。
つまり…疲労困憊になっていたと言うのがまざまざと理解できた。
押し倒された、と思っていたのは、抱き締めたまま力尽きて倒れ込んで寝てしまった、と言うことなのだろう。
「全く…無理しすぎなんだから…。」
御奉仕はやり過ぎだけど、でも我が身を省みずにと言うのは私の望むところでもな

い。
倒れられたとあっては、私の夢見が悪い。
だから…
「今は…ゆっくり休んで下さい。」
無茶しすぎの私の騎士を、そっと背に手を回して抱き締めて労う。
彼の手が緩むまで、私は彼の背を撫でて、まるで幼子をあやすように安眠を促していた。

「ん……。」
私は、薄らと目を開く。
映ったのは、私の部屋の天井。
私の部屋のベッドの上のようだ。
何故私はベッドで寝ているのだろうか。
確か昨日は…

部屋に戻って…
部屋には誰かいた。
そう、天使が居たのだ。
そこまでは覚えている。
そこからの記憶がない。
どうやってベッドで寝たのか。
その天使がどうなったのか。
それを覚えていない。
「あ、目が覚めましたか?」
視界の隅から、まるで見下ろすように顔を覗かせたのは、天使…リリィ様だった。
その服装は、城の侍女が身に纏うメイド服。
そう、それが最後の記憶だった。
「リリィ様…?」
「あ、起きちゃダメですよ。」
身体を起こそうとすれば、身体を押さえられて再び横にさせられる。
私の後頭部を、私の枕とは比べものにならないほどの柔らかな物が迎え入れる。
今のこの状況…

私は正に、リリィ様に膝枕をして頂いていた。
「ホントに…いきなり倒れ込んでくるからびっくりしました。」
「倒れ込む…？私が？」
「えぇ、私も巻き込まれて、ベッドにボスン…ですよ。」
ぷくっと頬を膨らませるリリィ様。少し怒っているのだろうが、それがまた愛らしい。
しかし…まさか倒れ込むなどと…どうやら私も修行が足りないようだ。これは鍛練を追加して…
「…もしかして、倒れ込んだのが修練不足だから、もっと鍛えよう…なんて考えてませんか？」
…何故バレた。このような無様な姿を曝しておいてそのままで居るなど、私には…
「どうせ、私の前で醜態をさらして、何もしないでいるなんて無理だ。って理由でしょう？」
何故筒抜けている…？
リリィ様は超能力者…？
否！愛故の以心伝心…!?
「ブライアンさん、変なとこで単純で顔に出るんですよ。さっきもちょっと苦虫をかみ

つぶしたような顔してましたし。」
「いやしかし…私の姫君の前でこのような醜態をさらして、何もしないというのはやはり…。」
ぺしっ！
額に痛みが走る。
が、鋭い痛みというわけでもない軽いもの。
それはリリィが私の額を軽くはたいた事によるもの。
「じゃあ、無理してこんな風に倒れて、そのお姫様に心配かけるのもブライアンさんの本意ですか？」
「いや…そう言うわけでは。」
「前に私が風邪を引いたときに言いませんでしたか？私のために貴方が犠牲になるのを認めないって…。騎士は確かに護ることを信条としているのでしょう。それは否定しません。ですが、護るのと身代わりとなるのとは違います。私の騎士と名乗るなら…その身を案じてください。私の騎士に求めるのは…ただそれだけです。」
決して侮っていたわけでもない。
だというのに、５つも歳の離れた少女に、私の騎士としての矜持を説かれることになろうとは。

だが改めて身に染みる言葉だった。
我が身が無ければ、護るべき方を護ることが出来ない。
己の保身を第一とするわけではない。だが、私自身の万全無くしていざというときにリリィ様を護れようか。
「申し訳ありません。リリィ様。私ブライアンめは、少々軽率でした。」
「本当にです。倒れ込んだときは、少し心配したんですよ？私を心配させた罰として、このまま私の膝枕でゆっくり休むこと。良いですね？」
「これはこれは…罰というよりも御褒美ですね。」
「じゃあ…私の騎士様に、普段のお礼と言う名の御奉仕、と言うことで。」
「リリィ様からの御奉仕……何と甘美な響き…。では…御言葉に甘えて…少し…休ませて貰います。」
「はい。ごゆっくり、お休み下さい。」
眠りに誘うかのように、リリィ様は私の頭を優しく撫でる。
くすぐったく、そして心地よいその愛撫に身を委ね、私は再び意識を手放した。
この愛しき姫を、私が護る。
その確固たる決意を新たに胸に刻んで。

『二人のグルメ　風の王国兵舎食堂の鶏南蛮定食とホイル焼』

目を閉じる。
自分の身体を構成する魔術回路を意識する。
すると、体内のマナが流れるのを感じることが出来る。
次に掌に向かってマナの流れを調整する。
掌が温かくなってきたのを感じたら、次は属性を。
一番馴染むのは、やっぱり風。
流れるそよ風をイメージすると、掌に何かが渦巻く感触。
風の魔法、その最初期の基本。それは自らがマナによる風を生み出すこと。それを練習していた。
これくらいなら、今まで反復していたから、難なく熟せる。
でも今は、
（渦巻く…刃を…。）
掌の風を鋭く、

薄く、
そして大きく。
掌の風は徐々に大きくなる。
風巻くそれは私のイメージ通り、まるで風の刃の様に掌に生み出されていた。
これは文献に記されていない、今のところ私オリジナルの術式。
本来中～遠距離戦用の攻撃手段である魔法、それを近距離戦に用いようというのだから、記していないのは当然かも知れない。
『オリジナル風魔法　ヴァーテクス』
渦巻く風の刃から、『渦』という意味を込めてこう名付けた。
刃が生成されたことを確認し、目の前の訓練用カカシに狙いを定める。
「えぇい！」
身の丈ほどに膨れ上がった渦で、カカシを袈裟切りにするように振るう。
すると、
まるでバッサリポッキリといとも容易く真っ二つに出来た。
「うん…良い感じです。」
槍はイマイチだけど、魔法ならある程度は使える。だったらそれを活かさない手はない。

試行錯誤の末に新しい術式が完成した充足感と幸福感に打ち拉がれていると、背後からとんでもないことに重圧が私にのし掛かってきた。

冷や汗が流れる。

身体が動かない。

それどころか足が笑っている。

「リ～リ～イ～…？」

「はうっ!?」

ガッシリと肩を掴んできたのはお姉様。その顔は笑顔満面…なのだけれど、目は笑っていなかった。

訓練の備品であるカカシを壊してしまったことで、お姉様にこっぴどく怒られてしまった。

それはまぁ…確かに、備品を壊すのは褒められたことではないし。

彼此正座で一時間。足が痺れて少し立てなかったのはここだけの秘密。
でも説教されたすぐでも、まだ試したい術式があったりするけど、流石にまたカカシを壊したら、お姉様の血管がとんでもないことになりかねない。
ヴァーテクスは槍よりも広範囲で、且つ切断力が腕力に左右されない。どれだけ風を鋭く出来るか、それだけだから。
「…となると、次は遠距離で広範囲をカバー出来る魔法ですね。」
あーでもない、こーでもないと思案する。なかなか術式が定まらず、もどかしい。
だけどそれが楽しい。自分の力で未知の世界を拓いていくのが。
むふー、こうなったら本を執筆できるくらいの数を組み上げて、世に広めちゃう勢いでやってみても良いですね～。
だけど風のマナストーンは近くの風の回廊にあるから、その奔流を感じやすいけど、他のマナストーンは近くにないからその流れを感じ取れない。…やっぱり近くまで行かないとダメなのかなぁ。
となると、旅に出なきゃだし、そもそもそんな許可、もらえないだろうし…。
…まぁいずれは世界を見て回りたいと思うわけでして。
そんなこんなでオリジナル魔法の術式を脳内構築していると、なんだか急激に
「お腹が…減りました。」

…

……

……

「よし、ご飯にしましょう。」

急激なマナの使用はお腹が空きます。今の私はいわば薪の切れた暖炉。燃料が切れたことで、その火は最早風前の灯火となり、その熱が下がってきたことで思考が散漫になる。このままでは押し迫る空腹の突風によって、ローラントの崖下に真っ逆さまになってしまいます。

よし、食堂を目指そう。

となったら善は急げと言う言葉があるように、足早にアマゾネス隊食堂へ。太陽を見れば、既に真南を超えている時間帯。道理でお腹が空くわけです。

「おやリリィ様、今日は遅い昼食ですね。」

食堂に到着すると、料理長が厨房から覗いてくる。

「ええ、ちょっと魔法の訓練をしてたら熱が入っちゃいまして…、今からでも大丈夫ですか？」

「大丈夫ですよ。席についてお待ちください。」

お昼の繁忙期を過ぎたみたいで、既に食堂はガラガラ。よし、これならゆっくりメ

ニューを選べるし、早くお昼が食べられそうだ。
席について、紙媒体に記されたメニューに目を通す。
焼き魚や煮込み料理など、定番の定番はカバーしてある。どれもこれも食欲をそそられるけど、焦るんじゃない。私は唯、お腹が空いているだけなんだ。
牛、豚、鶏、魚…。
そして焼き、煮る。
うーん…どれもこれも悩ましい…。今の私は何腹なのか…それが悩みどころです。
うんうん悩んでいると、メニューの隅に付箋で
『本日のおすすめ、あります。』
と付け加えられてる。…つまり、今日限定メニューもある、と言うことなのか…。
「すいません。」
「はいよ、ご注文お決まりですか？」
「今日のオススメって…なんですか？」
「今日は良い鳥肉と魚が入りましてね、ちょっと変わった調理法でお出ししてるんですよ。」
変わった調理法…
なんだろう？興味と食欲がメラメラと燃え上がるように湧いてくる…！

「オススメなら、鳥と魚、どっちにします？」
どうしよう？変わった調理法って言うのには惹かれるケド…、もしハズレだったらどうしよう？
えぇい、悩んでちゃダメだ。
魔法の訓練と一緒だ。
失敗を恐れてちゃダメだ。
今の私には、天の頂（清水の舞台）きから飛び降りる覚悟が必要なんだ。
もし失敗したとしても、過ちを気に病むことはない。ただ認めて、次の糧にすればいい。それが、大人の特権なんだから。
「じゃあ…鳥で。」
「はいよ！ちょいとお待ちください。」
お腹は括った。あとは野となれ山となれ。
そう開き直っていると、食堂に見知った…と言うか、見慣れすぎた人が入ってきた。
「おや、リリィ様。今の時間に昼食ですか？」
「えぇ。…魔法の訓練に集中しすぎてしまって。」
「鍛練を怠らぬその向上心、感服いたします。御一緒しても？」
「ダメと言っても、近くに座るでしょ？」

「流石リリィ様、私のことを解ってらっしゃる。」
心底嬉しそうに彼…ブライアンさんは、私の向かいに座る。
私は無言で手元のメニュー表を渡すと、ペコリと会釈してメニューを読み解いていく。
ややあって…
「すいません。オススメを1つ。」
「鳥と魚、どちらにします？」
「鳥と魚…そういうのもあるのか。…では魚で。」
「畏まりました。」
どうやら意図せずして今日のオススメをどちらも拝むことが出来るみたいだ。
厨房では何やら油で揚げる音が木霊しており、どうやらオススメのどちらか…もしくは2つとも揚げ物のようだ。
う～ん…その音、実に食欲をそそってくる。いつもの食事は、出来上がった物がテーブルに運ばれてきて、それをお淑やかに食べるばかり。こう言う調理過程から料理を味わう、と言うのも大切なんじゃないかな。
「随分と楽しそうですね、リリィ様。」
「え？そう見えますか？」

「ええ、料理が楽しみで楽しみで仕方ない。そう窺い知れるほどに。余程お腹を空かしておられたのですね。」

は、恥ずかしい…。

空腹と、調理の音でテンションが上がっていたみたいだ。

「まぁ、お気持ちは解ります。私も正直かなりの空腹でして…。」

「仕事、ですか?」

「ええ。少しばかり城周辺のパトロールをかねて、モンスターを間引きしてきた次第です。」

「…なるほど。」

間引き。

モンスターが増えすぎたことで彼らの食料が枯渇し、人間の界隈に現れないようにすることだ。かと言って全滅させればそれはそれで生態系が狂いかねない。増やしすぎず減らしすぎず…それが大切。

「お待たせしました。」

話し込んでいるうちに料理が出来たみたいだ。

２つのお盆を持った料理長が、それぞれを目の前に配膳していく。

「リリィ様が鶏南蛮定食、ブライアンさんがホイル焼ね。」

鶏南蛮

何の鳥の肉かはさて置き、

甘酢の甘味、酸味、そしてタルタルソースのコクの三位一体。一口食べればそこはもうマナの聖域。

ご飯

言わずと知れた銀シャリ。ほかほかの内に召し上がれ。

味噌汁

主役を脇で支えるニクい奴。私は味噌汁になりたい。

白菜の浅漬け

コイツと味噌汁があれば、充分ご飯が進む。けど脇でひっそり存在感を示す、裏方の主役、

私が頼んだ鳥のオススメ。

見た所、鶏の唐揚げ？それをタレに漬けて、その上にマヨネーズをかけた様な料理。サラダを添えて、小鉢には野菜。スープは黄土色。そしてローラントの料理では珍しい白米。

「以前、とある国の地方で食べたのを再現したんです。鳥肉が多量に入りましたし、実験的にオススメにしたわけです。」

「私のこれは…鮭か？」

ブライアンさんの主菜には、アルミホイルで丸めた何か。それを開けば、香しいバターとキノコの香りがフワリと広がる。底面に敷き詰められたタマネギ、その上に鮭の切り身。更にその上にキノコをたっぷり乗せて、ホイルで包んで蒸し焼きにしたみたいだ。

「良い鮭が入りましたので。すこし変わった調理法でお出ししてみました。」

ブライアンさんのも主菜のお皿が変わっただけで、他は私と同じくご飯とスープ、それに野菜の組み合わせ。

余りお米は食べ慣れてない。けどどうしてだろう？

食欲がスゴい勢いでボルテージを上げてきている…！

「い、頂きます。」

備えられたフォークを手にして、先ずはその存在感をありありと示している鶏南蛮という料理。縦に六等分切り分けられたその一切れをフォークで掬い上げる。

トロリとしたたるタレと、その上に乗っかるマヨネーズ。タレの味が未知の存在なので、正直ドキドキする。

「……はむっ！」

意を決し、一口頬張る。

一切れを二分の一ほどで噛み千切ると、タレが染み込んでふんわりした衣と、鳥肉独特の弾力が顎を刺激してくる。

けれど決して固くはない。寧ろ丁度良い位で、噛めば衣の中から鳥の旨みが詰まった脂が口いっぱいに広がる。

そして…

鼻を突き抜けるのは甘味と酸味。

甘く、そして酸っぱいそれは、衣に絡み付いたタレだ。甘さと酸っぱさが見事に混ざり合って、私の中に新世界を築いていく。

そこに追い打ちをかけるように上にかかっていたマヨネーズのコク……いや、マヨネーズじゃない。マヨネーズがベースなんだろうけど…なんだろう？シャキシャキとプリプリとした食感もあるけど…。

「それはタルタルソースです。シンプルに、タマネギの微塵切りと、パプリカ、あとはゆで卵をマヨネーズと、あと鳥に絡めてある甘酢を入れました。」

なるほど。

シャキシャキはタマネギとパプリカ、プリプリはゆで卵の白身と…。

でもこの甘酢とその…タルタルソース？この組み合わせは凶悪だ。食欲をそそる酸味を甘さとタルタルソースのコクで調和して、程よい酸っぱさに押さえ込んでいる。最初の一口を飲み込むや否や、残った二分の一を間髪入れずパクリと咀嚼。

うん、

うん。

鶏南蛮、いい。

鳥も良いけど、このタルタルソースも抜群に良い。

私はこのままではタルタルソースの愛好家でスペシャリスト…略して『タルタリスト』になってしまいそう。私は一向に構わないのだけれど。

口の中が鶏南蛮一色に染まるなか、視界の片隅に白く光るそれが入る。

白いご飯。

普段はパン食ばかりなのでこれは珍しいのだけれど、主食がご飯と言うこともあり、フォークですくって口に運ぶ。

（～っ!?!おぉう…!?!）

なんだこれは？

今何かがガチャリと填まる音がした。

まるで…まるでパズルのピースがズバリと合ったかのような。口の中でエインシャ

ントが乱射されてる。
美味しい…
美味しすぎる…！
ご飯を飲み込んだ私は、再び鶏南蛮を齧ると、それを追い掛けるようにご飯を頬張る。
至福の時だ。
普段食べないお米だけど、これはご飯が進む。
かき込みたい衝動を乙女の理性で抑えながら、一心不乱に頬張る。
…おっと、
少し頬張りすぎた。
口の中で鶏南蛮とご飯がフュージョンする中、あのスープが目に飛び込んできた。
少しはしたないけど、このスープで流し込んでみよう。
ズズッ…！
（ほわぁぁぁ…！）
今まで味わったことのない類のスープ。
しょっぱくて…でも塩辛くない、丁度良い塩気。何故か抜群にご飯にフィットする。
「それは味噌汁です。大豆を発酵させた味噌と言う調味料を溶かしたスープになります。」

ミソシル…恐るべし…。
…この分だと、この影でひっそりと小皿で存在感を示している野菜も…。
シャク…。
美味しい…！
程よい塩気、さっきのミソシルとはまた違った方向性のしょっぱさ。唯の塩の味だけではない。少しピリッとして、そしてコクがあって…。そして野菜の歯ごたえが楽しい。料理長が言うには、浅漬けというピクルスみたいな物だとか。
その味に思わずフォークが動き、ご飯で追いかける。
鶏南蛮、ご飯、味噌汁、浅漬け、ご飯、鶏南蛮…
その究極のループ…ハメ技に私は延々とコンボを喰らう。
これが食物連鎖…、
これが自然の摂理…、
これが森羅万象…、
私は今日、何かの悟りを開いた…気がする。
「リリィ様、本当に美味しそうに食べますね。」
「…ハッ!?」
半分ほど食べたところで、ブライアンさんの声によって我を取り戻す。見れば、ニコ

ニコとこちらの食べる様子を見詰める彼の姿。
一心不乱に食べていた私を、もしかしてずっと…？
「はうぅ…！」
穴があったら入りたい。
男の人にじっと見られてるのに気付かないなんて…
「あぁ、別に恥ずかしがることはございませんよ。良い食べっぷりなのは実に素晴らしいことです。」
フォローになっているのかどうか解らない彼の言葉に、私は更に羞恥の沼に沈んでいく。
「ふむ、リリィ様を辱めてしまったお詫びと言っては何ですが…」
「ご、誤解を招くような言い方!?」
「私のホイル焼…とやらをリリィ様に一口献上いたしましょう。」
そう言うと彼は、鮭の切り身をフォークで切り分けると、それをすくって私の前に突き出してくる。
そこからブライアンさんは微動だにしない。
ホイル焼
てこでも動かん

食べるまで
　　ぶらいあん
とでも言わんばかりに。
こうなると彼は頑固だ。
意を決して、差し出されたその桃色の切り身をパクリと口に含む。
これもまた美味しい…。
程よい鮭の塩気に振りかけられた胡椒。それから口いっぱいに広がるバターの風味とキノコの香り。そして敷き詰められたタマネギの甘味、…あとなんだろう？何かもう一つ味の決め手があるような…。
「コンソメにございます。コンソメを煮詰めて顆粒にした物を、味付けとして振りかけました。」
なるほど、それで何処か奥深い味わいが…。
ホイル焼…鶏南蛮とは違う方向性でまた美味しい。
「…私だけ貰うのは不公平ですね。」
ホイル焼は美味しかった。
だったら彼にも鶏南蛮を味わって欲しい。
そう思い立った私は、一切れすくい上げるとブライアンさんに差し出す。美味しい物

は共有した方が良いに決まってるもの。
「ほら、ブライアンさん。」
「あ、いえ…私は…その……。」
「…食べないん、ですか？」
「い、頂きます。」
　懇願して見るもので、割とブライアンさんは私がお願いしたら聞いてくれる。…この調子でストーキングも止めてくれないかな？
「…ふむ、鶏南蛮も実に美味ですね。」
「でしょ？ご飯が進むんですよ。」
「ふむ、確かに…これは白米が欲しくなる味だ。」
「ふふっ…私、鶏南蛮初めてだけど、のめり込んじゃいそうです。」
　そんなこんなで、私とブライアンさんは鶏南蛮とホイル焼を半ばシェアしながら、マッタリとした昼食に舌鼓を打ったのだった。

「美味しかったぁ…。」
「えぇ…実に美味でした。」
食後に出された東方のお茶のホッとする渋みに癒されながら、満腹の充足感に身を委ねる。
少し遅い昼食だったけど、こんな満足感は今までそうそう味わった事がないものだ。こうしてブライアンさんと面と向かって二人っきりでご飯を食べたのって…確か初めて会ったとき以来、かな？
パロで出会ったあの時が懐かしい。
「お下げしますね。」
「あ、はい、ご馳走様でした。」
「ご馳走になりました。」
料理長がお膳を下げていく。その最中、カラリと皿の上でフォークが滑った。
何故か…何故かそれが気になった。
フォーク…フォーク……ぁ……！
（わ、私……もしかしなくても、とんでもないこと…しちゃった…？）
思い出せば顔が熱くなってくる。

そう…私は、『自分が食べていたフォークでブライアンさんに鶏南蛮を食べさせてあげていた』のだ。

逆もまた然りで、そしてそれがどういう事か気付かぬまま、何度もシェアして完食した…。

つまり、

（わ、わた、わたし……こっこれ、か、かかか間接キ…）

瞬間、世界が真っ白になった。

意識がぼうっと薄らいでいくなか、ブライアンさんの呼び声が木霊するのが解る。

次に気付いたときは、部屋で寝ていたのだが、この事を思い出す度に、しばらく羞恥で悶える変な癖が付いてしまったのはここだけの話だ。

紅蓮の騎士　誕生編

『正夢と、夜這い的な何か』

「はぁ…。」

静かな夜の帳の中、私はちゃぷんと、私は顔半分を湯に沈めた。

温かな湯で身を清めるだけ。心もさっぱりするはずが、何処かモヤモヤする。

原因は言わずもがな、『彼』だろう。

彼が来てからと言うもの、私の生活はしっちゃかめっちゃかだ。何かにつけて、気付けば私のすぐ近くにいるし、着替えようものなら、鍵をかけてても部屋に入ってきて、自分の勧める下着を差し出してくる。その度にぶん殴って部屋から追い出しているのだけど、毎日のように懲りずにやってくるのだから、呆れを通り越して感心する。

かと言って、お姉様には同じようなことはせず、むしろ紳士的に接している。エリオットにもしっかり敬意を見せているし、アマゾネス達やお父様の評価も上々。今や城内で彼にギャアギャア言うのは私だけであり、そのやり取りも、皆にはただの照れ隠しだと思われているのだから、尚のこと始末が悪い。

「はぁ…もう上がろ…。」

考えていても仕方ない。
湯船から立ち上がった私は、モヤモヤを残しながら脱衣室へと浴室を進んでいく。
その二部屋を隔てるドアノブに手をかけようとしたとき、それは独りでに開け放たれる。
そしてその先に居たのは。
「いけません、リリィ様！まだ身体をしっかり洗えていません！さぁ！私が身体を隅々まで、余すところなく、これでもかと言わんばかりに洗って差し上げます！」
腰にタオルを巻いて、スポンジ片手に真剣な眼差しで私を見詰める彼（ブライアンさん）だった。
対する私は、彼がよもやお風呂にまで入ってくるとは思わなかったので、一糸纏わぬ生まれたままの姿。
しっとり濡れた髪も、
膨らみの乏しい胸も、
ちょっと気になる腰周りも、
何もかも。
そんな彼は、私の身体を一瞥する。
男の人に、自身の裸体を見られたことのない私は、顔が真っ赤に染まっていくのが自覚できた。

貧相な体つきをこうも見られてしまっては、もう恥ずかしすぎて、穴があったら入りたい程だ。

「失礼しましたリリィ様。」

そんな私の意を察してか、彼は優しく私を見詰めながら微笑んだ。そうか、ようやく自身の行動が異常だと気付いてくれたのか。これで明日から平穏がおとずれ…

「リリィ様の身体は、私にとって完成された芸術でございます故、思わず見惚れてしまいました。大変、美しゅうございます。そして芸術品は、磨き上げねばくすんでしまう。さぁ、石けんという名のワックスで、私が一級品に磨いて差し上げます！」

そう言うと彼は、手をワキワキさせながら、ゆっくりと私に手を伸ばして……

「ひゃあああっ!?」

彼の手から逃れるべく逃げた私は、自室のベッドの上で跳ね起きていた。

「はぁ……!.はぁ……!.わ、私の、部屋?」

見慣れたベッドに、インテリア。

所々にラビのぬいぐるみ。
ちょっと内容の偏った本が並ぶ勉強机。
間違いなく、私の部屋。
「…はぁ……ふぅ……ゆ、夢……？」
随分と、リアルな夢だった。
特に、ブライアンさんのあの手の動きとか、現実かと見まごうほどにヌルヌルと動いて…。
「どうかされましたか？」
「いえ、何かすっっっっっっごいリアルで、身の毛もよだつ位の嫌な夢を見たんです。」
「それはそれは…災難でございました。見た所、寝汗をかいておられる様子。お召し物を交換なさいますか？」
「そう、ですね。確かにべっとり貼りついて気持ち悪いかも…。」
「では、替えの下着と寝衣をご用意いたします。」
「ええ、よろしくおねがいしま……へ？」
シュルリと寝衣のリボンを解いた所で、何かがおかしいことに気付いた。
私は誰かと寝ていた訳ではない。
なのに、一体誰が私と会話していたのだろうか？

「どうしました?リリィ様。」
嫌な予感がする。
いや…
いやいやいやいや…
そんなはず無い
鍵をかけていた
ここには誰も、侍女すら入れないはず…
にも拘わらず、
「な、なんでブライアンさんがここにいるんですかぁ…!?」
さっきの夢に彼が出て来ただけに、思わず声がうわずってしまった。
それに何故、何の躊躇いも無く、タンスの中の下着と寝衣を探す彼が、私の部屋の中に居るだろうか。
「無論、この真夜中にリリィ様の悲痛な叫び声が私の耳に飛び込んできたからに他なりません。」
「ど、どうやって入ってきたんですか!?鍵が掛かっていたはずです!」
「リリィ様の危機とあらば、マナの聖域であろうとも馳せ参じる。それが狗としての矜持ですので。」

「答えになってるようでなってません！」
「リリィ様、汗を吸ったお召し物を着続けておられては、風邪を引いてしまわれます！今すぐ交換いたします故…」
「いやぁぁぁっ!!」
服を脱がしに掛かってくる彼の行為は、もはや強姦魔のそれだけど、きっと下心はないんだろう…たぶん。
でもでも！男の人に裸を見られるのはやっぱり恥ずかしいし…、それに…男の人に、私の身体は…。
「むしろ、このまま湯浴みに参りましょう！私が身体を隅々まで、余すところなく、これでもかと言わんばかりに洗って差し上げます！」
「それ、夢でも言ってたセリフぅ!!」
あれ、夢じゃなかったんですか!?
ドン引きする中でも、彼はどんどん服を脱がせようとする。
抵抗はすれども、やはりクラス３のロードの身体能力は高いもので、クラス１のランサーの私では抵抗にすらならない。
瞬く間に、私はベッドに押し倒されてしまう。
「ふんぬぅぅぅ！」

「必死に抵抗するリリィ様…メニアック…と言うものですね！」
「め、めに…？」
「ですが、そんな貴女の表情すら、私にとっては愛おしい…。」
「ふぇっ!?」
急に顎に手を添えられ、逸らしていた私の顔を、彼の正面に向けさせられる。鋭くも優しい眼差しが、私を射貫く様に見詰める。
「貴女に仕える私は…貴女の総てを知りたい……貴女の悦ぶ顔も…何もかもを……。」
「ん…！」
次は、そっと頬に手を添えられる。
男性特有の硬く、逞しい手。
それだけじゃない。
いくつものマメが潰れ、そして新しい皮膚になったことによる、特有のゴツゴツとした掌が、私の頬をそっと撫でる。くすぐったくて、何故か身体の芯が疼く。
「私を…闇から掬い上げてくれた貴女の…総てを。」
「ブライアン…さん…。」
「そして…護りたいのです…貴女の、騎士として。」
私を、護るため。

その為に、こんな手になるまで修練を重ねて…。
一体どれほどまで努力を重ねれば、こんな手になるのだろう。
どれほどの思いで剣を振るってきたのだろう。
総ては…わたしの…？
「で、でも…私の…プライベートと言いますか、そういった類も護ってくれたら…嬉しい…と言うか…。」
きっと頬が真っ赤に染まっているだろう。何とか視線だけでも逸らさないと、この真っ直ぐな瞳は見ているだけで吸い込まれそうで、身体を熱くさせてくる。
そして虚勢を張らなければ、堕とされてしまう程に、私には余裕がなかった。
「お任せくださいリリィ様。」
そんな私の虚勢を、彼は優しく、余裕たっぷりに答える。
その余裕が、ほんの少し腹が立つけど。
「今まで以上に、私はリリィ様の身の回りのお世話をさせて頂く所存です。」
「…へ？」
今まで…以上？
これ以上ないくらいにプライベートを掻き回して、なのにこれをパワーアップさせると、そういうこと？

これ以上のストーキングが待ち受けているとでも…？

そう考えると、今までときめいていた私の情熱は、見る見るうちに氷点下へと冷めていく。

「どうしましたリリィ様。表情が消えておりますが…？…しかし、デフォのリリィ様もまた…」

なにやら今度は向こうがときめいているけど、そんなの知ったこっちゃ無い。

するりと私は彼から抜け出すと、窓を開けて指笛を鳴らす。

そんな間も、彼は自分の世界にトリップしているようで、1人で悶えている。

何処までも私の表情は無かった。

そして、ややあって『彼女』は、私の部屋の窓際に降り立った。

「キュクル？」

「フラミー。何処か遠くへやって来てもらえる？」

首を傾げる私の友人に説明するように、私の後ろでフィーバーしている彼を背中越しに指さす。

ややあって理解したらしく、窓からその野太く、そひて白い腕を差し込むと、ガッシリと彼を握りしめた。

「ぬぁっ!?何をする!?この…獣畜生め…！私の至福の時を…！」

ようやくこちら側へ戻ってきた彼は、フラミーに掴まれたことを理解したのか暴れ始める。
が、四肢をガッシリと拘束する形で掴まれていたため、その抵抗も虚しいままだ。
「じゃ、ブライアンさん？」
「リリィ様…これはいわゆる拘束プレイですね？なるほど、リリィ様はそう言った趣向を…」
「幻惑のジャングルあたりで。」
そう言うとフラミーは二対の翼をはためかせ、西の方へと高速で飛び立っていった。
「…はぁ。」
フラミー（＋α）を見送って窓を閉めると、ようやく静かになった部屋で溜息を一つ。
「汗、流そう…。」
起きたときよりも遥かに汗を吸って重くなった一寝具を脱ぎ捨て、湯浴みに向かうのだった。
…まぁ彼なら問題だけど、問題ないだろう。
ほんの少し、残念な気持ちを抑えながら。

『少年の行方』

「で、翼あるものの父に何処かへ連れて行かせたと。」
「…はい。」
目の前には仁王立ちで腕組みしたお姉様が、正座した私に説教していた。
昨晩、フラミーを使ってブライアンさんをボッシュートしたのがお姉様やお父様、というか城内の皆にバレており、こうして私は寝衣のまま床に正座してお説教されている。当然と言えば当然、かな。
「全く…もう少し穏やかに済ませることが出来なかったんですか？」
「面目次第もございません…。」
流石にお姉様の言われることも尤もだ。
あの時は夢の内容がデジャヴして、更に夜の謎のテンションによってあんなことをしてしまって、冷静になった今ではやり過ぎたと言う後悔で胸が一杯になっている。
「ほんとにもう…こんな事のために私達の護り神を使うなんて…！貴女の力なら、窓から投げるくらい出来たでしょうに…。」
え？怒るとこそこ？

私は、抵抗するも無駄と悟り、あの羽畜生に掴まれたまま運ばれていく。
とりあえずこれから幻惑のジャングルからローラントまで戻らなければならないので、今の間に休息を兼ねて睡眠をとっておくことにする。
そこで私は、あの運命の分岐点の日を夢に見て思い出すことになった。

私の目の前には、青々と何処までも広がる草原。
遠く霞んでチラホラ見える風車。
大地の裂け目を抜けて、俺が目指すのは草原の王国フォルセナに辿り着いた。
かの国にいる英雄王、そして私が強くなるための大いなる存在を探して。

「ふむ、お主の向かうべき所、とな?」
私は目の前にいる初老の男に自身の道を問う。
あの後、私が後に慕う事になるリリィ様と別れて、後ろ髪引かれながら質屋で指輪を売り（少々みすぼらしい見た目の私が、高級な指輪を持っていたことで、かなり疑わしげに見られたが）、パロから出るジャドへの定期船に乗り込んだ。そして洞窟を抜けた先の聖都ウェンデルで、私は光の司祭様に助言を頂いた。
遍く人々の悩みを聞き、その行く先を示すという彼は、私の顔を見るなり、そのフサフサに蓄えた顎髭を撫でながら、眉間にしわを寄せて悩み出した。
「お主、中々面白い気を感じるのう。」
「面白い、だと?」
当時の私は9歳。未だ未熟者だけに、口の利き方という物がなっていなかった。
「人を見るなり面白いと……?随分と無礼なんだな。」
「いや、面白い、と言うのは些か語弊があったな。言い換えるなら、奇妙な運命…と言ったところか。」

「奇妙…？」
「うむ。」
　確かに、アルテナの生まれで魔力を持つ両親から生まれたにも関わらず、魔法が使えないというのも確かに奇妙なものだが…。
「お主の運命…それは大きく２つ見えておる。」
「…２つ？」
「そうじゃ。お主の行く先。お主が決める道。いわば分かれ道。」
「俺がどっちを選ぶかで、運命が大きく変わる、とでも？」
「聡いのう。伊達にアルテナの出ではないか。」
　私はまだ、この地点でアルテナ出身とは名乗ってはいない。にも拘わらず、この御老人は見事に言い当てた。やはり、光の司祭は伊達ではない。
「続けよう。まず１つ。アルテナから遙か西。ひっそりと浮かぶ孤島に、広大に広がる『ガラスの砂漠』と呼ばれる場所がある。その先にお主の人生を決めうる何かが…見える。」
「何か…？」
「うむ…明確には解らん。じゃが黒いもやが掛かっておる。ワシの勘じゃが…邪悪な何かを感じる。」

「邪悪な…。」
「もう一つはここより北西。自由都市マイア、黄金街道、大地の裂け目を抜けた先…草原の王国フォルセナ。そこにもう一つの人生を決める者が感じられる。」
「フォルセナか…。」
確かフォルセナは王国直属の騎士団が結成されるほど剣術が盛んな王国だ。魔法王国出身の私が、そこへ向かう意味は感じられないのだが。
だが、ガラスの砂漠の先にある邪悪な何か、それにむざむざ向かうと言うのも躊躇われる。
「確か、ガラスの砂漠は…世界大戦の終息の地…だったな?」
「うむ。竜帝が黄金の騎士と相打ちになった場所でもある。」
「黄金の騎士…か。黄金の騎士の出身も、確かフォルセナだったか?」
「そうじゃ。そして英雄王リチャードの親友でもあるな。」
フォルセナという場所が、私にとってこの上なく運命の支点になっているようだった。
魔法王国出身の私でも、そのフォルセナという地がどのようなものが、そしてどのように変わってくるのか、それが知りたくて興味が湧いてくる。
「…解った。俺が向かう先は決まった。」

「ふむ、それがどちらであっても引き留めはせん。だが後悔だけはするでないぞ?」
「自分で決めたことだ。後悔も文句もない。…やはり、アイツの言ったとおり、アンタに会いに来て正解だったよ、光の司祭。」
「役に立てたのならば何よりじゃよ。…それよりもお主、よもや丸腰で洞窟を抜けて来おったのか?」
「…それがどうかしたのか?」
　魔法以外の戦闘方法を学ばなかった私は、戦う術を持ち得ていなかった。アルテナから出て、お金もなかった私は、唯只管にモンスターに見つからないように進んで、その果てに辿り着いたのだから。
「流石に丸腰はマズかろう。まずは装備を調えるのじゃ。槍にせよ剣にせよ、何らかの武器があるのと無いのとでは、安全性がまるで違うからのう。」
「…それもそうだな。」
「それと!じゃ。
装備は買っただけでは効果が無い。ちゃんと装備するのじゃぞ!」
「当たり前だろう。何を言っているんだ爺さん、ボケたのか?」
　そう言って私は今度こそ踵を返して大聖堂を後にする。
　申し訳ありません、光の司祭殿。幼き日の私の未熟による無礼、どうかお許しを。

ただ、その言葉の意図が、未だにわかりかねないのも事実なのですが。

そして、最初に戻る。

「はぁっ!!」

ウェンデルで買ったアイアンソードで、目の前を暢気に跳ねていたラビを一刀両断する。

この世界において、一番狩りやすいモンスターとして有名な奴らで、私は道中剣の練習を兼ねて振るっていた。

最初こそはその重量に振り回されがちで思わぬ反撃を受けていたが、慣れというものは我ながら恐ろしいもので、再びジャドに着く頃には中々様になっていたように思う。

「やはり中々難しいものだな、剣というのも。魔法とは別の意味で。」

そこまで力の鍛練を積んでいなかった私は、日課に筋トレを組み込んでおく。最初こそは筋肉痛にさいなんでいたが、幼い時期というのが幸いしてか、日に日に、徐々にその筋力は増えていったように感じた。

そして、自分でもそれなりに強くなれたと自身が付いた頃に、私はフォルセナへと足を踏み入れた。

『英雄王との邂逅』

私はその時生まれて初めて、自身が憧れる存在を見つけた。
目の前で刃を潰した騎士剣を携えるのは、偉丈夫と言うに相応しい体格の男性。
彼の威厳を表すかのような鬚と、高貴さを表すロールした金髪。
「どうした?その歳で旅を続けるからには、その程度ではあるまい?」
相手は無傷、対し私は打撲痕だらけ。
圧倒的だった。
剣を握って1〜2週間の未熟者が相手をするなど、お門違いも甚だしい。
「さぁ、アルテナより来た剣士の腕前、このリチャードに示すがよい!」
何せ相手は、世界大戦を終結に導いた立役者、英雄王リチャード国王陛下なのだから。

遡り数時間前。

目の前に威厳を象徴するかのような巨大な門が聳え立つ。
その大きさに私は圧倒されながらも、光の司祭の助言を頼りにやって来た意味を思い出す。
私はリリィ様と約束した。
私の為し得たことを、いつかお話しする。
あの御方のお陰で、私は変われたのだと。
当時、たった一人の少女との小さな約束。
やがてそれは、私の運命その物が１８０度変わってしまうものだとは、誰も、私自身ですらも知らない。

フォルセナの城下町に足を踏み入れた私は、まずは英雄王にお目見えしようと、大通りを真っ直ぐ王城へと進める。国王ならば、良い見識を持っておられるだろうと考えたのだ。
長旅で疲れているはずなのだが、その足取りは軽い。むしろ、草原を歩いていたときよりも。
やはり、光の司祭に言われた運命を変える存在と言う言葉に惹かれたのだろう。一刻

も早くその存在に会いたいと、気持ちが急けていた。
途中、王城へとつづく階段前の広場。
そのど真ん中に、なにやら職人達が石柱と思しき巨大な石を、木で出来た足場を使って某かを削っていた。
「…これは何を作っているんだ?」
手近に居た親方らしき男性にふと尋ねてみる。
「お?坊主は旅人かい?まぁ今はまだ面影すらねぇが、これは英雄王の石像を作ってんだよ。」
「英雄王の…。」
軽く10メートルはありそうなそれを、職人達が少しずつ、少しずつ丁寧にハンマーとミノで削っていく。
「あの方と…帰ってこなかったが、ロキの奴のお陰で、世界は竜帝の奴から救われたんだ。その栄誉を俺達なりに広めるために、こうして石像を掘ってんのさ。」
「…そうか。」
そういえばアルテナにも理の女王の石像があったな。両親は…元気にしているだろうか。…まぁ、今となっては親不孝者の私が言えた義理ではないが。
「ロキも予定してたんだが…アイツの妹のステラの奴が、『家族遺して逝くような奴の石

像は要らない』って泣きながら言うもんだから…作ろうにも作れないんだよな。」
「……。」
その時、幼い私はステラさんの思惑は解らなかったが、今なら解る。
きっと、ロキの姿を模した石像を見る度に、在りし日の彼を思い出し、亡くしたときの事を思い出してしまうからだろう。
それに、きっとロキが生きていたなら、その時も石像を作らないように言っていたとも想像できる。
「…と、坊主。これから城に行くのかい？」
「そのつもりだが。」
「で、その背中の剣。もしかして、騎士団に入ろうって腹積もりかい？」
「いや、英雄王にお目見えしたいだけだ。」
「だよな！坊主の歳で騎士団に入りたいってのは、流石に無謀って奴だよな！」
…まぁ9歳で屈強な大人がひしめく騎士団に入ろうと言うのは、些か高望みであるのは確かだが。
「…ま、6歳で騎士団に入るって吠えてる奴もいるけどな。」
そう言うと親方が向ける視線の先には、その年相応の赤茶色の髪をした少年が木刀を持ち、恐らく騎士が鍛錬用に使うかかしに向かって、「俺は騎士になるんだぁぁぁっ!!」

とタコ殴りにしている。
「…まぁ気持ちはわからんでもないがなぁ…。」
「??」
「ん、まぁこっちの話だ。まぁ英雄王に謁見するなら、失礼の無いようにだけな?」
「勿論だ。」
そうして俺は、作りかけの英雄王の石像の横を抜けると、目の前を先程の少年が、
「うぉぉぉぉっ!英雄王バンザーイ!」と砂埃をあげながら通り過ぎていった。…元気なものである。
さて、手っ取り早く英雄王を尋ねて私の行く先を示して貰うため、見張りの兵士に用件を伝え、城内へ入ることの許可を得る。
見るからに子供で、そこまで小綺麗でもなかったが、光の司祭の紹介である旨を伝えると、そこまで労せずして兵士は警戒を解いた。やはり光の司祭の存在は偉大なようだ。
兵士が稽古に励む中庭を抜け、さらに豪華絢爛と言わんばかりのホールを抜け、ようやく私は謁見の間へと足を踏み入れる。ホールの優美さとまた違った、荘厳な雰囲気を漂わせるそこは、王が座するに相応しいものだった。
「ほう、お前か。光の司祭殿がここに向かうように伝えた少年は。」

私を射貫くように見詰めるその眼光に一瞬怯むが、ここで礼を失しては意味が無い。すぐさま片膝をついて頭を垂れる。

「は……ブライアンと申します。英雄王と名高きリチャード陛下との謁見、光栄の極みに…」

「はっはっは！そう固くなるな。…まぁ、英雄王…と聞こえは良いが、まだ王としては新米だ。そこまで畏まられるのに慣れておらん。ましてや貴殿のような少年にはな。」

そう、リチャード陛下は先の大戦の後に王位を継承しておられる。それまでは王子だったとか何とか。

「して、私にどのような用件だ？光の司祭殿に私に会えと言われてきたのか？」

「いえ…光の司祭殿の助言では、フォルセナに俺…いや、私の運命を変えうる人物がいる、と…。ならば到着して先ずはリチャード陛下に窺うのが早いと感じた次第です。」

「ふむ、運命を変える、とな？」

「えぇ。陛下なら御存知ではと…。」

フム、とその蓄えられたヒゲに指を添え思案するされるリチャード陛下。

ややあって、陛下は申し訳なさそうに眉をハの字にされる。これで答えは出たようなものだ。

「私の知る限り、その様な人物にこころあたりはないな。」

「そう、ですか。」
「すまぬな。力になれなくて。」
「いえ。私としては英雄王に謁見できただけでも充分な成果です。故郷の奴等が羨ましがりますよ。」
「ほう…故郷、とな？差し支えなければ、何処の出か聞いても良いかな？」
「魔法王国アルテナです。」
その名を出したとき、リチャード陛下の目が丸くなった。余程予想外だったようである。
「アルテナ…随分と懐かしい名が出たものだ。」
「はぁ。」
「なに、私の知り合いがアルテナにいるものでな。最近は音沙汰がないから少し心配しておったのだ。」
確かに、アルテナは少し閉鎖的なものもあるから、周辺の国からは若干孤立している。そもそも環境が環境なので、好んで知り合いに出会いに行く人など稀だ。ましてや一国の王ともなれば殊更。
「時にヴァル…いや、理の女王は御健勝かね？」
「ええ。相も変わらぬ美しさでございます。ただ…」

「…ただ、なんだ？」
「王女であるアンジェラ様の御転婆ぶりに、毎日頭を抱えておられる御様子でした。」
「ぶふぅっ!?!?」
よもや英雄王が目の前で壮大に吹き出そうとは思いもよらなかった。何が悲しくて彼の唾液を浴びねばならないのか。
「む、むむむ娘、だと？理の…女王にか？」
「…??えぇ、そうですが。」
陛下の問いに肯定すると、思いっきり悩ましげな表情で俯いてしまわれた。その額には脂汗が浮かび、先程の威厳はかなり薄れてきているような気がする。
「おい。」
「はっ！」
傍らに傅いていた近衛兵と思しき人に、何やらゴニョゴニョと話し込んでいる。
無礼と思いつつも聞き耳を立ててみた。
「これから毎月、アルテナの理の女王に１０万ルクを渡すように。」
「はい？」
「子細は聞くな。一言で言えば養育費だ。」
「…はぁ、陛下がそう仰るなら。」

???…よーいくひ?

「んっんん!!ブライアンと言ったな。見苦しいところを見せた。」

「あ…いえ、お構いなく。」

「ところで、何故にアルテナ出身の其方が剣を携えている?アルテナは魔法が主流のハズだが…。」

「それは…。」

ここで私は思い悩む。

私の旅の根元の部分にあたるものだ。これを陛下にお話しするような内容なのだろうか?

否、ここまで一国王が私に親身に接して下さっているのなら、話すべきだろう。話した上でならば、陛下が某かの道を示して下さるかもしれない。

そうして私は陛下に包み隠さず話した。

魔法が使えないこと。

そのコンプレックスで国を飛び出したこと。

リリイ様の助言で光の司祭殿と出会ったことを。

「…そうか。周りとの格差、それによる劣等感。…辛かったな。」

「…いえ。」

「これからも旅を続けるつもりか？」
「ええ。私は約束しました。私が何かを成し遂げることを。それが成されるまでは、最低限続ける腹積もりです。」
「ふむ、ならば。」
　陛下はすっと立ち上がり、一歩一歩踏みしめるように私に近付いてくる。
　かなりガッシリした体格だけに、私は少し身を引いてしまう。
「護身術として、私が剣術を少しばかり指南しよう。これからの旅、強いに越したことはない。」
「へ、陛下!?この後の予定は…」
「構わん。少しくらい後に回しても問題なかろう。」
「し、しかし！」
「私とて玉座に座ってばかりでは身体が鈍ってしまうからな。そうなってはあの世にいるロキに笑われてしまう。」
　状況が飲み込めない私は、ポカンと口を広げて陛下を見上げる事しか出来ないでいた。
　そんな私の手を、陛下は握って立たせると、先導するように中庭へと歩いていく。
「どうした？付いてこいブライアン。」

私は言われるがまま、ついて行くことしか出来なかった。

そして、冒頭に戻る。
陛下の怒濤の攻めにより、私は完全に防戦一方だった。
未だ完全に剣に慣れきっていない為、思うように防御できない。そんな私に陛下はお構いなく攻めを続けた。
「そんな腕では、かの少女に報告など夢のまた夢だ！」
「くっ…！」
大きく吹き飛ばされた私は、磨り減った体力を戻すため、大きくなった呼吸を整える。
だが、リリィ様の事を出された私は、それが思うように出来ないでいた。
「このまま魔物の餌になる位なら、約束など忘れてアルテナに帰るがよい。…さもなくば、この私に一太刀入れてみせよ！」
その一言で、私は何かがプツリと切れた。
約束を、忘れるてアルテナに帰る？
あの惨めな日々に戻れというのか？
居場所などない、唯々堕落した日々に？

そして…リリィ様との約束を破れと？

「ふざ…けるな…！」

腸が煮えくりかえる。

いくら一国の王といえども、その時の私は許容できなかった。

私の中に、まるで紅蓮の炎のごとき怒りが、ぐつぐつと沸騰してくる。

「あの子との約束を…忘れろ…だと？」

もはや、歯止めが利かなかった。

目の前にいるのは英雄王ではなく、ただ私の中の根元にあるものを否定してきた忌むべき存在。

一太刀…せめて一太刀。

一矢報いなければ気が済まない。

「絶っ対…ぶっ飛ばす！！！」

そこからは覚えていない。

真っ白になった視界。

手に走る鈍い痛み。

背中に感じる固い石の感覚。

「…やるでは…ないか。」

視界が戻る。
目の前には、右手を押さえた英雄王。
その手には、ポッキリと折られた木刀。
頬には、うっすらと一文字に血が流れ落ちてきていた。
「先の踏み込みと剣の振り、そして全身のバネを最大限に乗せた一撃。…見事、私に一太刀入れたな。」
一太刀？
私が？
頭がぼやけて、一体何をしたのか解らない。
覚えていない。
「確かに、お前は魔導師としての才能が無い。」
…そうだ。
だから私はアルテナで落ちこぼれていたのだから。
「だがマナの扱いに慣れていないお前の体の使い方は、どちらかと言えば剣士向きだ。」
…そう。
これがきっと私の分岐点の1つの言葉。
「故に先程の一太刀は見事だった。

いいセンスだ。」
「いい…センス…。」
陛下のその言葉を最後に、精根尽き果てた私は意識を手放した。

『騎士道の始まり』

私が目を覚ましたのは、翌日早朝だった。
遠く射しだした日の光が閉じた瞼を照らし、ゆっくりと目を開く。
目を擦りながら、意識を覚醒させていく。
何故私は寝ているのか？それに、ここは何処なのか？
周囲を見渡せば、緑を基調とした壁紙や木を用いた調度品。
落ち着く雰囲気の部屋だ。
壁には私の赤いローブやアイアンソードがかけられ、その傍らの机には衣服が綺麗に畳んでおいてある。
「いっつ…！」
身体を動かそうとすれば、突き抜けるような痛みが身体を走り、より鮮明に意識を目覚めさせる。
（そうだ…俺は英雄王に稽古を付けて貰って…。）
最後の最後、私は英雄王の持つ木刀を抜き、彼の頬に掠り傷を入れた所までは覚えている。しかしそれに至るまでの過程を全く覚えていなかった。

頭が真っ白になり、所謂、無我の境地というものなのだろうか？

兎にも角にも、私は手傷を負わせてしまった英雄王に謝罪しなければならないと判断し、痛む身体を押さえながらローブを纏って、ヨロヨロと宛がわれた客室を後にする。部屋を出れば、二階が吹き抜けになっている、所謂ホールになっていた。フォルセナ城は解りやすい構造になっているので、割と易々と玉座の間につづく扉を発見できる。

「もう起きても大丈夫なんですか？」

扉へふらつきながら近付いていると、ふと背後から声を掛けられる。ふと視線を向ければ、この城の侍女と思しき女性が。

「…少々痛むが問題ない。」

「全身打撲まみれだったんですから、無理しちゃダメですよ。」

「いや、英雄王に謝罪をしなければならない。掠り傷とはいえ、一国の王に手傷を負わせて謝罪もなければ、アルテナに泥を塗るのとおなじだ。」

それと言うほど故郷に未練は無かったが、それでも後腐れ無いようにしたいのも確かだ。だからこそ筋を通さなければならない。

「まぁ…打撲こそ多いが、旅の中で負った傷もそれなりに痛かったからな。これくらい我慢出来る。」

視線を戻し、何とか扉に辿り着く。背後で「強がるわね…」と聞こえたが、敢えて無

視しておく。
荘厳な扉を開けば、相も変わらず玉座に座った英雄王が、威厳たっぷりにこちらに視線を向けていた。その頬には手当の跡なのか、ガーゼが当ててある。
「おぉ。目覚めたか。身体の具合はどうだ？」
「はっ…！少々痛むが問題ありません。」
「そうか。私としても少々熱が入りすぎてしまったのでな、許せ。」
「い！いえ！私の方こそ、陛下に手傷を負わせてしまい、申し訳ありません！」
傅く私に、一国の…それも英雄王が謝罪する。
そんな恐れ多いことがあって良いものと、私も慌てて謝罪すると、英雄王は大らかに声を弾ませて笑い始めた。
「はっはっは！何、貴公に比べれば私の傷など微々たるものだ。差し引き私の方に負があることに相違あるまいに。故に、貴公が謝罪する必要は無いぞ。」
「…恐縮です。」
余り食い下がるのも失礼にあたると考え、私はここで陛下の謝罪を受け入れる。それに満足したのか、陛下は2人からもその口許を緩めた。
「では、互いにスッキリしたところで本題…貴公のこれからについて話を進めるとしようか。」

これから…つまり、私の次の行く先…もしくは出会うべき人物を示されるのか。
当時の私はそう思っていた。
だが、目を閉じた陛下は、私の想像を超えることを考えておられた。
「昨日の剣技の冴え、見事であった。9という齢でそこまでの剣閃を放てる貴公は、私としてはやはり剣士…ひいては騎士に向いていると考えている。」
そこで、と陛下は言葉を繋ぎ、その鋭い双眼を見開く。真っ直ぐ私を射貫くように視線を向け、その圧に思わず、私の手には脂汗が浮かび、ゴクリと固唾を飲み込んでしまう。
「ブライアン、貴公を我がフォルセナ城の騎士団に雇い入れたいと私は考えている。」
騎士団に雇い入れる…
つまり、フォルセナを護る力になれと…そういうことなのだろうか。
「無論、強制ではない。貴公が旅を続けて、別の可能性を見出すのも良いだろう。総ては、貴公の望み次第だ。無論、答えを見出したならば、かの少女の下へ向かうために、脱退を許可するぞ。」
確かに、このまま周辺諸国を巡って見聞を広め、その上で私の成し遂げられる事を探すのも1つの道だろう。
しかし目の前には剣の道が示されている。

そして、私の中で何かがささやく。
極めたい、と。
歩み始めた剣の道。
マナを感じ、操る力が無くとも、自身の腕があれば極めていけるこの道で、何処まで自身を高めていけるのか。それを見極めたい。
「俺のような未熟者で良いのなら…騎士団加入、謹んでお受けいたします。」
「そうか。…ならば精進せよ。いずれ私を超えてくれることを、大いに期待しているぞ。」
「はっ…!恐れ多いながらも、目指すところとさせて頂きます。」
「うむ!」
リチャード陛下は満足そうな笑みを浮かべて頷く。
これが私の騎士道の始まり。
あの時の約束を果たすため、私は高みを目指す。
それは、いつになるかは解らない。
しかし必ず、リリィ様の下へと舞い戻る日を夢見た日でもあった。

「おぉ、そうだ。」
「???」
「流石に9歳の少年を殺生の場に置くというのは、世間体としてマズいだろう?」
「はぁ…。」
　一応、ここに来るまでモンスターとの殺生の場にいたと言うのに今更だろう、と言うのは野暮と言うものか。
「15になるまで、兵舎で暮らすと良い。その間の衣食住の心配は要らんしな。」
「兵舎に? いやしかし、流石にそれは…。」
「そこで非番の兵達に、兵法や戦い方を学ぶも良し。鍛えるも良し。強くあらんとするならば、その方法は其方に一任しよう。有意義に使うが良い。」
「…はっ。度重なる御厚意、恐悦至極にございます。」
　こうして私は好待遇で、騎士団に入るという未来を約束され、フォルセナに留まることとなった。
　これから6年。先輩騎士に指示を請い、下積み重ねて、立派な騎士となる。
　その日々はアルテナでは得難く、そして何物にも代え難いものだった。

剣の扱い方
立ち振る舞い
規律
兵法
座学

先輩騎士は誰もが快く私に教鞭を振るって下さり、私はそれを反復、飲み込もうと必死に食いついた。

幸い、魔法の理論を理解するのは得意であった為、覚えるのは苦ではなかったし、何より魔法理論と違う観点で戦いを知る事が出来た喜びはひとしおだった。私は1日たりとも欠かすことなく、日々鍛錬し、そして勉学に打ち込んだ。

そして…

あっという間の6年という歳月が過ぎた。

フォルセナ城下町で真しやかに囁かれる噂。

それは15歳という年齢で準騎士を飛んで、正騎士に抜擢された天才少年の噂。

赤いマントを翻し、巧みな剣技でテストに合格した彼の噂。
人は彼をこう呼ぶ。
『紅蓮の騎士』と。
そんな彼に、対抗意識を燃やす少年がいた。
「紅蓮の騎士…俺が絶対超えてやる…！」
そして彼もまた、日々剣を振るい、志願するその時を待っていた。

『私が、変わるとき』

「勝負しろ！紅蓮の騎士！」

正騎士となって初めての休暇。

今まで見習いとして先輩騎士に衣食住を養って貰っていた私は、正騎士になって自立、初めて私物の買い物に繰り出した。

思えばフォルセナに着いた日以来６年、私は兵舎、訓練場、城内以外を歩いたことがなかった。…ニート言うな。

そんな矢先に英雄王の像の前で、私より頭１つ分小さな少年が木刀を携えて目の前に立ち塞がっていた。

「…勝負？」

「そうだ！俺は騎士になる！お前を倒して、俺は強いって皆に認めさせるんだ！」

その少年の目はギラギラと、まるで野獣のように輝いていた。

何が何でも強くなる、いや、成し遂げるという強い意志が灯った眼。

成る程、ともすれば私の６年も彼のような眼をしていたのかも知れない。

確かに、悪くない目だ。

しかし、
「断る。」
「な、何だと…！」
「私は君と戦う理由がない。それに、こんな往来で戦いを仕掛けるなど、騎士を目指すものとして相応しい行いと思うのか？」
「ぐぬぬ…！」
こういう直情的な手合いは、彼に根ざしているものに基づいて論するに限る。証拠に、彼はそれに気付いたのか、ギリギリと歯軋りをしている。
しかし、恐らくは私より年下にも関わらず、鍛え上げられた体躯。それに加えて彼の掌に出来た多数のマメの跡。そして、使い込まれた木刀。
成る程、立ち振る舞いはともかく、彼の騎士になるという意志は、確かに強く、そしてしっかりしたものなのだと理解できた。
「少年。」
「なんだよ…！」
「名はなんと？」
「……デュラン。」
「歳は？」

「１２。」
「ではデュラン。３年…３年だ。１５になって、騎士の採用試験に受かったとき、私は君の挑戦を受けよう。それまで、今までと変わらぬ研鑽を積むと良い。」
「さ、３年…!?」
「そうだ。騎士団に入れば、模擬戦をするのに理由は要らない。騎士は止む得ない私闘は原則禁止されていてね。ここで君と刃を交えたとなれば、君は騎士に刃を向けたものとして、私は規律違反した騎士として、２人仲良く罰せられるだろう。そうなれば君は、夢である騎士になることは未来永劫叶わなくなる。それは嫌だろう？」
　しっかりと、諭すように語れば、デュランと名乗った少年は大人しくなり、自身の行った事への自覚が芽生えてきている。…理解の早い子で助かるな。
「だから、君が騎士団に入った暁には、正々堂々…模擬戦だが君の挑戦を受けよう。それでどうだろうか？」
　これが私に出来る最大の落とし所だろう。
　それはデュラン少年も理解しているらしく、反論はない。
「３年…３年後…ぜってーお前をぶっ飛ばすからな！」
「あぁ。私もぶっ飛ばされないように、精々鍛えておくよ。」
「余裕ぶってられんのも今の内だかんなー!!!」

まぁそんな捨て台詞を吐いて、デュラン少年は通りを全力疾走して去って行った。
何というか…嵐のような少年だったな。
「よう、お前さん、6年前に居たガキンチョじゃねぇか。」
背後からの声に振り向けば、6年前にこの場所で英雄王の石像を彫っていた職人の親方だった。6年と言う歳月を感じさせるほどに、彼は少し老け込んでいたし、見上げるほどだった身長差は、殆ど変わらない物になっている。
「まさかお前さんが本当に騎士に…しかもいきなり正騎士になるたぁ恐れ入ったぜ。」
「えぇ、正直私もこうなるなどとあの時の予想もしていませんでした。」
「っかぁぁぁ！立ち振る舞いも板に付いてるなぁ！」
年を食っているとは言え、まだまだ現役であるその腕で感慨深げに肩をバンバン叩かれては、正直痛いのだが…まぁそれを言うのは野暮と言うものだろう。
まぁそれでも、浅い付き合いとは言え、フォルセナで城内以外に自身が知る人間に会えるというのは正直嬉しいもので、私は思わず苦笑いを浮かべる。
「しっかしお前さん、あの腕白坊主のデュランを宥めるたぁ、たいした奴だ。」
「…そこまで手を焼いていたのですか？」
「いんや、手を焼いてたわけじゃねぇがな。騎士になるって必死こいて訓練してるのは、皆微笑ましいって思ってたことだ。でもよ…お前さんが正騎士になったって噂になっ

てから、その必死さが無謀に早変わりよ。ステラの奴も注意しても聞かねぇし…正直心配してたんだよ。まぁ、アンタに言われて少し大人しくなったら良いんだが…。」
「解りました…折を見て、少し様子を窺うようにします。」
「頼むよ。…まぁ親父のようになりてぇってアイツの思いも解るんだが…。」
「父のように？」
「おぉ。アイツ、黄金の騎士ロキの息子なんだよ。だから騎士になるって思いも人一倍強ぇのさ。」
　成る程…立派な父の背を見たからこそ、それに対する憧れも強いというわけか。
「父の背、か。」
「ん？何か言ったかい？」
「いえ、何も。」
　私にとって、父はもはや居るようで居ないような存在。憧れるであったはずの背ももはや朧気…否、今の私には不要のものだ。
　私が目指すべき背は、王として、国の父として、相応しい威厳と偉大さを持った陛下なのだから。

「ふむ、特に異常はないか。」
私が騎士になって1ヶ月。
今私は、単独任務でフォルセナ管轄下である土のマナストーンの調査をすべく、宝石の谷ドリアンに訪れていた。資料の通り、その宙に浮いた巨大な石は神秘的な光を放っており、見ているだけで吸い込まれそうになる。
マナストーンと言うのは、遙か昔に神獣という、世界を滅ぼしかねない危険な存在を封じ込めたもの…所謂、楔石のようなものだ。マナストーンが砕ければ神獣は復活し、世界は破滅へと向かっていくことになる。それがこのマナストーンだけではない。世界には、火、水、風、土、木、月、光、闇と、8つのマナストーンが存在する。その一つ一つに一体ずつ神獣が封印されているので、それらを各国が異常がないかどうかを見守っているのだ。
火はナバール。
水はアルテナ。
風はローラント。
土はフォルセナ。

木はディオール。
月はビーストキングダム。
光はウェンデル。
闇のマナストーンは所在が不明なので管轄できないのが不安なところだが…。
「…やれやれ、落ち着いて調査もさせてくれないか。」
背後の物音に私は剣を抜き、振り返る。
「おぉっと!·待った待った!·ワタシに敵意はありませんよ!·紅蓮の騎士サン。」
その存在は、とても奇怪だった。
まるで道化師ながらも、不死者のような禍々しさを感じるような…。
「ワタシはアナタに会いに来ただけなんデス。ついでにマナストーンもね。」
「マナストーン…だと?·ここはフォルセナ管轄下のマナストーンだ。部外者の立ち入りは禁じられている。」
「解ってますヨ。まあ…相も変わらず光ってて複雑になりますがネ。それが確認できただけで、ワタシ的にはオールオッケーですので。」
どうにもこの男の目的が読めない。
奴の言う目的を果たしたというが、それでも私は警戒を解かない。
「では、もう一つの目的を…。」

「私に会いに、と言ったな？お前のような知り合いは私にいないはずだが。」
「いえいえ、知ってるのは私が一方的に、と言うことです。…単刀直入に聞きましょう。アナタは…どちらかと言えばワタシ達側のハズ…なのに何故、アナタはソチラ側にいるのですかネ？」
この男との出会いが、リリィ様との出会いと同じくして私の中の何かを変えた。
そう感じたのは、このしばらく後のことだった。

『私が、変わったとき』

「私が…本来お前達の側…だと？どういうことだ？」
宝石の谷最奥で、私は道化師のような男と相対していた。
マナストーンの様子見と、私に会うため…そういう奴の言葉は胡散臭い。だが何処か、聞いてみたくもなる奇妙な感覚を覚えていた。
「ええ、言葉の通りデスヨ。アナタは本来、ワタシと同じ側にいるハズなのです。なのにナゼか、そちら側に…。少し興味が湧きましてネ。こうして直接会いに来た次第なんデスヨ。」
「…お前の言う、側、だの何だの…イマイチ腑に落ちんな。なぜそうも言葉をぼかすのか。もし、私の周囲に害成すならば…。」
「オォット！ステイステイ！短気は良くありませんネ。言ったハズです。ワタシに敵意はありませんト。」
そうして、『死を喰らう男』と名乗った胡散臭い男は、その仮面のような骸骨をカタカタ鳴らしながら近付いてくる。
「アナタ…騎士になったトカ…。」

「…だとしたらなんだ？」
「正直……いや、ぶっちゃけ……いやいや、控え目に言って……似合わないっス。」
「よし、斬るか。」
「ＮＯＮＯＮＯＮＯ!!ウェイトウェイト!!べ、別に怒らせようと思ったワケじゃないデスヨ!?」
　この男…かなりの反射神経なのか、私の最速の振り下ろしを白刃取りしている。…巫山戯た見た目だけではないようだ。
「ワタシが言いたいのは、アナタが傅く側…と言うのが合ってないように思うんデスヨ！」
「…何？」
「アナタはどちらかと言えば、支配する側……面に出さないだけデスがネ。」
「ふん、何を根拠に…。」
「つまりアナタはＳ!!と言うことデスヨ！」
「は…？」
　私が？Ｓ？Ｓとはなんだ？

「しかも、自覚無く、面に出さない分、ワタシよりねちっこいデスネ。」
「いや…Ｓとは…なんだ？」
「知らない!?この世はＳかＭかに別れていると言うのに!?」
何を絶望しているんだこの男は…。
そこから奴による世のＳＭ講座が始まった。
ちなみにこの男もＳ…らしい。
「おわかりデスか？アナタはＳ。つまり、ワタシ側の人間。
に！
も！
関わらず！なぜ騎士等という傅いて仕えるＭの権化とも言わんばかりの存在になっているのデスか!?」
「知らん。」
「あぁ、何という素質への冒涜。ＳＭの神に対する反逆心…いや、これもＳたる所以デスか…！」
なんか、色々と危ない奴の様だ…。正直関わってはいけない気がする。
「アナタ！まだワタシを疑ってますネ!?」
「逆に疑いが晴れる要素が全くないんだが？それに、貴様の世界（ワールド）で語るんじゃない！」

「ワタシのザ・ワールドではありません！人は必ずＳとＭに別れているのデス！ワタシは一目見ただけでそれを見分けることが出来る！その証拠に！ワタシがアナタが思い描く人をＳかＭかに分別してあげマス！」
「は…？」
　そう言うと奴は、そのいかにも怪しげに手を私に向けて翳すと、禍々しい呪文を唱えながら気持ち悪い指の動きで何かを探っている。
「見えました…！アナタ…大切な約束をしたお嬢さんがいますネ？」
「……！」
　なぜコイツがリリィ様の事を!?
「なるほどなるほど…リリィ様…愛らしい名デス…。そのリリィ様は……ズヴァリ！」
「ず、ズヴァリ？」
「Ｍ!!つまり、アナタと相性バッチリ！」
　わ、私とリリィ様が…相性バッチリ？
　い、いやいや！この胡散臭い男の言うことだ…！信じるものか…！
「アナタとの約束……果たすのをいつまでも待つ…辛抱強いことデス…。健気ささえ感じるその我慢強さ…Ｍだと思いませんカ？」
　くっ…た、確かに奴の言うことも最もだ…だが信じてしまっては…！

「つまり！彼女は攻めを待っているのデス！幼き日の約束！それを果たし、アナタがＳとして攻めて来るのを！」
「な……なんだってーー!!」
何と言うことだ…
リリィ様は、私の攻めを…ずっと待ち焦がれている…!?
私は世界がひっくり返ったかのように感じた。
「ククク…どうやらアナタ、私と同じ側に着いたようデスね…？」
「あぁ……何やら私には見えていない世界があったようだ…感謝するよ、盟友。」
「いえいえ…アナタとリリィ様…上手くいくことを願ってますヨ…！では…。」
彼の言わんとすることを私が理解した事に満足した盟友は、まるで霧が霧散するかのようにかき消えた。
胡散臭いのは相変わらずだが、私は何か悟りを開いたかのように視界も、そして心も晴れやかだった。
「ふ、フフフ……リリィ様…私は必ず貴方の下へ馳せ参じます…！それまでどうか…お待ちくださいますよう…！フフフ…ハハハハ…ハァーッハッハッハッ！」

「へっくち！」
「あら？どうしたのリリィ。風邪？」
「い、いえ…何か…寒気が…。」

『彼との約束』

私は覚醒した。

リリィ様への攻めの奉仕という愉悦に。

だがこれはリリィ様にのみ相応しい。他者を蔑ろにするわけではないが、リリィ様が至高にして究極…。全てと言っても過言ではない。それは騎士として忘れてはならないし、リリィ様も望むところではないだろう。私は騎士道に準じているのだからな。

「…おい、アンタ。」

「ん？何かなデュラン。」

私は休暇に親方との約束を果たすため、デュランの鍛錬を見に来ていた。

彼が無理な鍛錬をしていると聞き、その歯止めと的確な鍛錬をさせるためだ。

最初の内は『お前の指図は聞かねぇ！』と意地を張っていたが、剣の振りの修正箇所を指摘、それを彼が試しに実践して動きが良くなった事に驚いていた。それ以来、口はまだ悪いが、指示には従ってくれるようにはなっていた。

「なんか…あったのか？」

「なにか、とは？」

「何か結構な頻度でニヤついてるからよ。正直、軽くヒくわ。」
「む…そ、そうか。」
いけないいけない。表に出ていたか。
ここはポーカーフェイスに務めなければならない。
周囲に不快感を与えるのは、私としても望まないからな。
「やはりキミには剣の才能が溢れているな。飲み込みが早い。」
「へっ…今更気付いたのか？俺は父さんを目指すんだからな、こんなとこで止まってられるかよ。」
「だが、少々猪戦法だな。ただのカカシ相手だから反撃はないが、対人戦ではそうはいかない。時には避けることを頭に入れておいた方が良い。」
「何言ってんだよ。ヤられる前にヤる！それに超したことないだろ？」
確かに彼の言うことに一理ある。迅速且つ的確に敵を仕留めなければならない状況も存在しうるのだ。
「護る戦いもあることを忘れるな。誰かを庇いながら、味方の到着を待たねばならない事もある。そうなれば、受け身の戦法も必要となるんだからな。」
「受け身の…？」
「その為にはまず、観察眼を磨け。通常戦闘に置いてお前の言う攻めの姿勢は確かに大

事だろう。だがその中で、相手がお前の攻撃のスキに合わせてカウンターしてくる可能性もある。そうなったとき、お前は不利になる。」
「…だったら、反撃の隙なんて与えねぇ。護りを崩す力をぶつけりゃ良いじゃねぇか。」
「…まぁそれも確かにアリだが…。」
それを実際行うには、並大抵の努力が必要になる。力その物は勿論、あらゆる相手の動きに合わせた攻め柔軟性。フットワーク。諸々…。
…だが、彼がそれを成せるかどうか。それは神のみぞ知る…と言ったところか。
「ならばそれを成せるよう、しっかり鍛錬しろ。小手先の力だけでは、その戦法は極められないからな。」
「へっ…言われなくても…!」
やれやれ、こう言うのを脳筋とでも言うのだろうか。
とにかく攻撃にものを言わせた力押しは、時として恐ろしいものだ。だが中途半端なものでは巧くあしらわれる。彼がその一線を越えられるかどうか…。
（フッ……やはりデュラン、お前は楽しみな奴だよ。）
そう言って木刀を打ち付ける音を背に、私は城へと歩き出す。
夕暮れに少年の雄叫びが、何処までも高く響いていた。

そして、時はあっという間に過ぎ去った。

3年後。

フォルセナ城中庭

その中央で、重厚な鎧を着込んだ若者と、若草色の額充てと胸当ての軽装の若者が、互いの得物をぶつけ合う。勿論刃は潰してあるから、余程のことが無い限り致命傷にはならないだろうが、軽装の若者の一撃は、その限りではないように感じてならなかった。

「はっ！ブルーザー…腰が引けてるぜ？」

「抜かせ！これからよ！」

重装の男はその装備から想像できないほどの踏み込みで間合いに入ると、袈裟切りを放つ。剣閃も申し分ない。

だが、相手が悪かった。

「悪いなブルーザー！」

一閃

見事な横に切り払われた一撃は、重装の若者の脇腹を的確に捉え、その勢い余って鎧を砕いて吹き飛ばした。

その鎧の下から現れた肉体は決して柔なものではない。寧ろ屈強さを感じられるほどに鍛え上げられていた。そんな彼の鎧を、刃を潰した剣で砕き、剰え吹き飛ばす。

彼は…極めたのか…力の極意に。

「あいつに挑むまでの数え切れない夜がオレを叩き上げた。…それが俺の全てさ。」

恐らく意識を失っているであろうブルーザーは、進行員による担架で退場していく。

「勝者！デュラン!!」

若手剣術大会

その優勝者は、３年前から修行を見守ってきた彼が、ものの見事にもぎ取ったのだった。

「よう、ブライアンさん。」
　表彰式を終え、私は兵舎への廊下を歩いて行くと、先回りしていたデュランに声をかけられた。
「デュラン…先ずは優勝おめでとう…と言っておこうか。」
「ハッ！…ま、礼は言っとくか。優勝なんざ、通過点に過ぎなかったけどな。」
　優勝者である彼は晴れて準騎士になり、明日から轡を並べる同志になるのだ。少々ぶっきらぼうだが、最低限の礼節は持ち合わせるように口を酸っぱくして3年過ごしたので、多少はマシになっている。
「これで俺もようやく騎士の仲間入りだ。」
「そうだな。…これからもよろしく頼むぞ。」
「ま、よろしくされる前に、3年前の約束、覚えてっか？」
「あぁ、勿論…。修練所に行こうか。」
　3年前…彼と交わした約束。
　騎士になったら、彼の挑戦を受ける。
　彼は目の前の目標としてそれを目指して3年の鍛練を積んだのだ。それを蔑ろには出来ないし、私は約束を違える気もない。

「約束を果たそうデュラン。騎士として、キミの挑戦を受ける。」

『２人の任務』

「勝負だ紅蓮の騎士!!」
「…またか、デュラン。」
　再び絡んでくるのは準騎士のデュラン。
　初戦で見事下して以降、毎日のように模擬戦を挑んでくる。まぁ彼の気持ちが折れないのは流石と言うところだが。
「これから任務の受理だろう？さすがに任務の前に体力消費は、上司として頂けないな。」
「ぐ、ぐぬぬ…。」
　デュランの配属は私の下となった。
　流石に年若い騎士に何人も部下を着かせることはなかったため、実質私とデュラン、２人の部隊。
　それだけに小回りが利くので、任務の内容は多岐にわたる。彼と２人で熟した任務はそこそこの数あるが、それでも任務の合間に模擬戦を仕掛けてくるのはどうかと思う。
　流石に報告書作成をすっぽかして挑んできたときは、切り札（ステラさん召喚）を使ったが。

ともあれ、
やはりしっかりと論せば解ってくれる彼の素直さに感心しつつ、私達は玉座の間へと足を運んだ。
「うむ、良く来たな、ブライアン、デュラン。」
「「ハッ！」」
目の前に居る英雄王リチャード陛下に私達は敬服する。
出会ってから9年。顔に貫禄が出て来ており、益々威厳が溢れている。
「其方達を呼んだのは他でもない。とある所にそれぞれ親書を言付けて欲しいのだ。」
「親書を……いえ、それぞれ、と言うことは、我々が単独任務に着けと？」
「そうだ。マナストーンの保護においても、各国の連携は不可欠。先ずはその二国との連携を組もうと考えた次第。そこで、ブライアンはアルテナに行って貰う。」
「…ッ！アルテナに…？」
まさか私が任務でアルテナに行かされるとは…。
いや、可能性はあると覚悟はしていたはずだ。今更…私が及び腰になるわけにもいかない。
「…其方が彼の国で受けていた処遇は理解している。だが今の其方は立派な騎士。それを笑うものがいるのならば、それはフォルセナを笑うものだと伝えてやれ。…胸を張る

のだブライアン。其方のこの9年、誰よりも自身に厳しく鍛えていたのは、私が一番知っている。それを笑うものは…誰もいない。」
「ハッ!…アルテナへの親書、紅蓮の騎士ブライアン、この身を以て届けます。」
「うむ。さて、準騎士のデュラン…其方はの向かう先だが…。其方にはローラントに行って貰う。」
「風の国に…?畏まりました。」
「うむ。互いに厳しい環境への任務となる。が、共に騎士、準騎士の中でも抜きん出た実力の其方達ならば、必ず成し遂げられると信じている。武運を祈るぞ。」
「ハッ!」

アルテナか。
このような形で戻ることになろうとは、世の中何が起こるかわからないな。
だが1つ、気掛かりがある。
「デュラン…お前の初めての単独任務だが…」

「お、おう？」
「ローラントにリリィという少女…年齢は…恐らく１２、３だろう。もののついで、と言っては何だが、様子を見てきてはくれないか？」
「リリィ？」
　こんな事を他人に…部下に頼むのもどうだというものだが、知っておけば少しは胸のつかえが取れると言うものだ。
「うむ、特徴としては金髪…としか解らん。…可能であれば、だが。」
「…ほ～～ん。」
　頼む私に、何やら含みのある笑みを浮かべるデュラン。これはよからぬ事を考えている顔だな。
「若手最強と名高い紅蓮の騎士様が、よもや色恋沙汰とは…。」
「む、色恋沙汰などではない。…ただ。」
　私が少しシリアスな声になっていたのを察したのか、デュランはニヤけ面を引っ込めた。
「私が騎士である所以…それがはかって私が絶望の最中に陥っていたとき、幼き彼女が救いだしてくれたからなんだ。…私の命は、彼女に救われた。」
　彼女がいなければ、出会わなければ、私は恐らく絶望の果てに沈んでいたかも知れな

い。今の私が真っ当で居られるのも、全ては彼女によるものが大きい。
「故に私は強くなろうとした。彼女のために…。」
「…初めてだな。アンタが強くなろうとした理由聞いたの。」
「む、そうだったか？」
「…戦う理由ねぇ…。俺はただ、父さんみたいに強くなりてぇって理由で剣を振るい続けたからなぁ。騎士になったのも、父さんを目指してたってのもあったからさ。」
確かに、デュランの強さは本物で、将来聞き及ぶロキの強さに迫るほどになるだろう。
しかし、このままでは彼に追い付く事も、追い抜くことも出来ない。
ロキとデュランには、決定的に大きな差があるのだ。
それは力や経験ではない別の差。
それに自分で気付かない限り、彼はロキに並べず、そして超えられない。
「まぁ強くなる為に１人で任務を熟して修行を積むのも良いだろう。大地の裂け目を抜けるまでは道中一緒だ。任務、抜からないようにな。」
「はっ！上等だ。伊達や酔狂でフォルセナの騎士やってねぇよ。」
相変わらずの減らず口だ。だが、それでこそ彼であるが所以であり、頼もしい。
「ふっ……頼りにしてるぞ。」
「…けっ。」

照れ臭そうにそっぽを向くデュラン。
しかし、
この任務が私達を苦しめるものだったとは、今の２人に知る余地もなかった。

おっと。そうだ。
「だがデュラン、１つ言っておく。」
「???」
「もし貴様がリリィ様にになんらかの破廉恥な行為に及んだとしたら…私は貴様をボン・ジュール殿の大砲に詰めて、３００キロの爆薬と共に射出する！マナの女神とリチャード陛下に誓って貴様を八つ裂きにするつもりだ！わかったな!?」
「お、おう。」
釘はしっかり刺しておかなければ。

『帰郷の決別』

フォルセナを出発し、大地の裂け目出口からデュランと別れてマイアへ。そこから定期船に乗って約1週間。私はようやくアルテナの玄関口であるエルランドに到着した。相も変わらぬ寒空を通り越した気温は、温暖なフォルセナの気候になれた私の肌に容赦なく突き刺さる。

「…懐かしいな。今は昔…9年以上も前か。」

あの時は自暴自棄になってしまっていたために冷静ではなかったが、今思えば9歳という年齢で広大な零下の雪原を越えてこの町まで良く辿り着くことが出来たものだと、あの時の幸運を末恐ろしく思う。

今の年齢でも一歩間違えれば命を落としかねないのだから、努々油断せずに向かうことにしよう。

手頃な道具屋で、耐寒具や携帯食料等を買い足し、エルランド到着時刻が昼過ぎなのもあって今日は宿で一泊しておく。

明日は早朝から急ぎアルテナに出発し、夜までに到着しなければならない。一応天候の変化などで到着できなかったときの事を考慮して野宿出来るものを用意しているが、

使わないに越したことはない。
明日は早いのだ。
だから早めに就寝し、日の出と共に出発だ。

正直、日々の鍛錬がここまで恩恵を授けてくれるとは思わなかった。
日々の鍛錬で鍛え上げられた足腰は、難なく雪の道を踏み進み、想定よりも速いスピードで歩いていける。そうして辿り着いたのは零下の雪原の中盤…丁度アルテナとエルランドの中間地点の橋だ。遠く見れば、遥か白みがかった先に巨大な城壁がうっすらと見えてくる。
あれがアルテナだ。
携帯食料を齧りながら、この分だと夕方までには到着できそうなペースだと計算する。だがやはり何が起こるかは解らないので、ペースを落とさず、体力を一定温存しながら再び歩み始める。
今のところ、モンスターに出くわしたのは数回程度だが、そこまで気にするほど強く

もなく、一個まんまるドロップを消費する程度のものだった。
そして、
エルランドを出てから１０時間。
その懐かしき巨大な門は、今私の目の前に聳え立っていた。
「止まれ。」
城下町入口で、やはり門番に呼び止められた。
「その装い…フォルセナの騎士が何の用だ?」
やはり防寒具を着けていてもバレるものはバレるようだ。
ここで事を荒立てては任務に支障が出る。私は大人しく静止し、懐からリチャード陛下より賜った書簡を取り出す。
「私はリチャード陛下より理の女王への親書を預かってきたフォルセナの正騎士。理の女王にお目通り願いたく。」
「フォルセナの…?なにか、身を立てる証はあるのか?」
「証…か。騎士という装い以外はないが…。私が元アルテナの民と言っても信じてはもらえないか?」
とりあえず…カードとして私の出自を伝えることで、多少なりとも不信感を薄められれば重畳なのだが…。

「お前が…元アルテナの？」
「ブライアン…と名乗れば良いか？９年ほど前に家出した身だが。」
「ブライアン…家出……あ！魔法が使えない落ち零れ！」
やはりこう来たか。予想はしていたが、改めて言われると正直クるものがある。
しかし今の私はフォルセナの騎士。私情を捨て、任務を果たさなければならない。
「今の私はフォルセナの騎士。魔法云々は関係ないだろう？」
「はっ！逃げ出したお前が騎士？魔法が使えないお前にはお似合いだな！どうせ騎士って言うのは剣しか仕えないロクデナシの集まりだろ！」
「…私個人を言うならばともかく、私の属する騎士団を貶めるのは辞めて頂こう。これ以上は国家侮辱になる。」
「…ちっ、通してやる。…だがちょっとでも妙なマネしてみろ。お前の恋い焦がれた魔法で拘束してやる。」
「ほう…それはそれは楽しみだな。」
努めて冷静でいられた。これもリチャード陛下の激励の言葉が心に染みているからこそのものだろう。改めて感謝しなければ。
横目で睨み付けてくる門番のとなりを抜け、城下町に一歩踏み入る。
するとどうだ？

今まで身を刺すような寒さだった周囲が、まるで春の…フォルセナの気候に近い何とも程良い気温へと変化する。

これこそが極寒の地でアルテナが栄える所以、理の女王の魔力の恩恵だ。町と城に結界を張り、その内部を温暖な気候に保っている。

城下町を抜ける中、過ぎゆく人々の視線はやはり物珍しいものを見る目だ。騎士という装いがアルテナでは見かけないものなので仕方ないだろうが…。

城の門番にも似たようなやり取りを済ませ、魔法の講習の際に良く入っていた城内へと足を踏み入れる。

懐かしい中庭を抜け、その先にある玉座の間へ。

「良く戻りましたね、ブライアン。貴方の帰国を歓迎します。」

「はっ！理の女王様におかれましてはますますの御健勝で！」

玉座に座っているのは、アルテナを統べる理の女王…。その佇まいから慈愛を感じるほどにその表情は柔らかいものだった。

「9年前に行方不明となった貴方が、よもやフォルセナの騎士となってアルテナを訪れてくれたことには、正直驚きましたよ。」

「数奇なる運命の巡り合わせによるものでございます。良き人々に巡り会えました。」

「そうですか。貴方の旅が実り多きものであったことは何よりです。」

微笑む姿も、女王…と言うよりも母と言った方が良いほどに慈しみと情愛に満ちていた。

とても魔法至上主義の王国のトップとは思えない。きっと私の両親を含めた魔法至上主義に囚われている人間の思想なのだろう。

「しかし、ピーマンが食べられないのを矯正させられそうになっただけで9年も家出はやり過ぎですね。」

「…は？ピーマン？」

「貴方が失踪した理由について御両親に聴取したら、そう答えられました。騎士になって克服出来ましたか？」

ニコニコと尋ねてくる女王の言葉は、裏も紛れもない本心から来るものだろう。

だが私の両親の言葉を鵜呑みにしてしまっているからこそのそれは、到底私にとって許容できるものではない。…恐らく両親は、魔法至上主義であることを伏せるために嘘を吐いたのだろう。悪いのは私で、両親は何の不自由ない生活を与えていた、と。自身の保身のために。

「お言葉ですが女王陛下。その理由には虚偽があります。」

「虚偽？」

「私は家出の理由が好き嫌いだなどという安易なものではございません。」

もはや自身の立場のために自身の子供を悪者にする等という両親には愛想が尽きた。
ならば、縁切りとして子の私が引導を渡してやるとしよう。
「私がアルテナを脱した理由…それは…」

「と、貴方方の息子は申していますが、申し開きはございますか？」
先の私が国を脱した理由を伝えて数十分後。
私の横には、最後に見た時よりもやや老けた両親が、同じように女王陛下に傅いていた。
２人のその顔には汗がダラダラ溢れており、見苦しいとしか言えなかった。
「ま、全くの事実無根でございます。私共は魔法云々で我が子を虐げるなど…。」
「そうです！あの日の晩だって、その子は夕飯のメニューに癇癪を起こして飛び出して…！」
言い訳とは…益々見苦しいな。
私は横目で苦しい言い訳を並べる２人に冷めた視線を送る。

「ほら！ブライアン！何嘘を吐いているんだ！お前が我が儘を起こして家出したんだろう!?」
「両親に罪を被せるなんて…親不孝よ！」
「今すぐ女王陛下に嘘であったことを説明しろ。そうすれば家に戻ることも考えてやらんでもない。」
…良くここまで嘘八百を並べられるな。それに、罪を被せているのはお前達だろうが。
「…そうだな。…もう終わりにしようか。」
「そ、そうだ！ようやく認めたか！」
「認めるわけないだろうが…！終わりにする、と言うのは、こんな茶番に終わりを告げる、と言うことだ。」
怒気を孕んだ私の言葉に両親は表情が固まり、そんな両親を流しながら私は理の女王に1枚の紙を渡す。
「これは…？」
「私の知る、両親を含めた魔法至上主義者のリストです。両親を呼ぶと解った時にこのような展開を予想していたので。」
「で、出鱈目だ！そんなの、何の証拠にも…！」

「ならない、か?だが今の私と貴方の心理状態を鑑みて、どちらが信憑性が高いものか理解できるでしょう?」
「き…貴様…!9年間育ててやった恩を仇で返すのか!?」
「確かに、9年間養っては貰いました。しかし育てて貰ったワケではありません。養うのと育てるのは違うものだと言うことをお忘れ無く。」
養うと言うのは、生活や生存を維持させる事を意味する。育てるはそれに加えて教養や、愛情が備わってくる。
つまり、私が両親から受けていたのは『養い』に近しいものであって、『育み』ではなかった。
もちろん、生まれたときは愛情があったのかも知れない。だが少なくとも、私が魔法を使えないと解ったときから、育みは養いへと変わってしまったのだろう。
「御両親。」
熱くなってきた玉座の間に、透き通った、まるで清涼のような声が響いた。
「どうやら…虚偽は貴方方の方だったようですね。」
「女王!?いや…それはこの子の妄言で…!」
「お黙りなさい。」
静かな…静かな怒り。

決して怒鳴らない。だが普段穏やかな理の女王から怒りの圧が玉座の間を支配した。
「親が子を虐げるなど言語道断。あまつさえ、自身らの過失を子供に押し付けるなどと……！」
「あ…いや…それは……！」
「個人の魔法至上主義主張は勝手です。私が許せないのは、同じ子供を持つ親として、貴方方がしてはならないことをしたからに他なりません。」
国のトップから言われては、もはやぐうの音も出ないようで、２人は俯いて何も言えなくなっていた。
「処分は後ほど伝えます。退室なさい。」
項垂れたままの私は両親の背を見送る。その背は途方もなく小さく、そして哀れだった。
「父上、母上。」
そんな２人を私は追い掛けて呼び止めた。
チラリと、こちらに目線を向ける彼らのその目は、何らかの弁護を求めているかのような眼だ。それが私にとって決意を決定的にした。
「産んでいただき、ありがとうございます。お蔭様で私は護りたいものを見つけました。これは９年間に掛かったであろうお金と、少ないですが手切れ金です。」

ドサリと、かなりのルクが詰め込まれた皮の袋を床に投げやる。
手切れ金、それを意味するところを理解した両親は顔を青ざめていく。
「こう見えて私はフォルセナの正騎士。給金をこの時のために貯めておきました。これで貴方方と私は赤の他人。今後関わりないように。」
見下していた相手からの情けと侮蔑の視線。それが堪らなかった私の元両親は、ルクの入った袋を掻っ攫い、逃げるように玉座を後にした。
ようやく…私の中で何かが澄み渡った。少し清々しい、そんな気分になれた。

『旧友との再会』

「お見苦しいところをお見せしました。」
「いえ、謝るのはこちらの方。貴方にかのような仕打ちがあったなどと気付けなかった私の不徳の致すところです。」
「勿体なき御言葉。」
両親が去り、静寂を取り戻した玉座の間。
再び私は傅き、謁見の続きとなる。
「所で、貴方が帰郷したのは、あの方々との決別が目的ではないでしょう?フォルセナの騎士が、アルテナにはるばると何故?」
「それについてはこちらを…リチャード陛下よりの親書に御座います。」
封をされた親書を懐から取り出すと、理の女王の側付きの兵士が受け取り、仲介として女王へと渡す。
封を解き、黙々とその内容に目を通す。大まかな内容は口頭で陛下より伺っていたが、実際は何が書かれているのか、子細までは知らない。
待っている間、再び沈黙となった玉座の間の時間は、体感としてゆっくり流れていた。

「リチャードの案は解りました。」
リチャードと、理の女王は陛下を呼び捨てた。
やはり陛下が理の女王の本名であるヴァルダと呼んでいたことから、止ん事無き方々のただならぬ間柄と言うことなのだろう。
「確かに今この世界はマナストーン…ひいてはマナの恩恵で成り立っています。そのマナストーンを護ることに、私は賛成です。」
「では…。」
「ええ。リチャードの案、お受けします。その旨の返事を記すとしましょう。」
理の女王が片手を慎ましやかにあげれば、傍らの側付きが一旦退室し、ややあって書簡を認(したた)める用具を持ってくる。
それを受け取った女王は、慣れた手つきで書簡に陛下への返事を認めると、側付きを通して私に渡す。
「確かに受け取りました。この書簡、必ずや陛下にお届けいたします。」
「ええ、頼みましたよブライアン。」
私は書簡を懐に忍ばせ、立ち上がり、女王に一礼を…。
そう思った時だった。
「アンタは…。」

背後からの声。
遠き昔の面影を残すその声は、随分と懐かしい物を感じた。
「お久しぶりです、アンジェラ王女。」
振り返れば、何処か昔と変わらないあどけなさを残しながらも、大人の女性へと変わった昔馴染みが、玉座の間入口に立っていた。
「ブライアン…なの？」
「はい。９年ぶりですねアンジェラ女王。見違えましたよ。」
「っ……！」
瞬間、
王女が涙を溜めたと思えば、思い切り抱き締められた。
「バカバカ！急に居なくなって…アタシがどれだけ心配したと…！」
「…その件につきましては、申し開きのしようがございません。」
「で、帰ってきたら帰ってきたでちゃっかり騎士になってて…どーしたって言うのよ!?そもそも、大きくなりすぎでしょ!?この９年間で一体何があったの!?」
「お、落ち着いてくださいアンジェラ女王。一度に問われても…。」
「いきなり居なくなるからでしょバカー!!」
私の頬に、王女の鉄拳がめり込む。

なるほど、良い右だ。
感動的だな。
実に有効打だ。
お陰で何処からかピコーン、ピコーンという、警告音が鳴っている。
「アンジェラ?落ち着きなさいな。そう捲し立てては、知りたいことも知れませんよ。」
「ふぅ〜…ふぅ〜……そ、そうね。さぁブライアン!根掘り葉掘り聞かせて貰うわよ!」
私は為すがまま、アンジェラ王女に首根っこを掴まれ、ズルズルと連行されていったのである。

「…ふーん、なるほどね。それで騎士に…。」
「えぇ。私としても思わぬ適性と言うものでしょうか。今となっては、感慨深いものです。」
中庭のベンチに案内されて、私は事の端末をアンジェラ王女に掻い摘まんで説明していた。やはり魔法王国の生まれである私が騎士をしているというのに驚きが隠せな

かったようだ。
「王女の方はどうです？あれから…」
「……。」
尋ねた瞬間、さっきまで勝ち気だった王女はそのなりを潜めて押し黙ってしまった。
この様子だとやはり…
「…私、まだ使えないのよ魔法。」
やはりか。
思えば9年前、魔法が使えないのは、私に加えてアンジェラ王女もだった。だが、一般の家の出である私と比べて、アンジェラ王女は王家。蔑みの対象にはなっていなかった。良く一緒にホセ先生の折檻を喰らっていたのは懐かしい思い出だ。
だが、9年という歳月が経つにも関わらず、未だ魔法が使えないとは…。
「やっぱり…私って才能無いのかしら？」
やはり、彼女にとって魔法が使えないのはコンプレックスのようだ。母親が強大な魔力を誇る理の女王。その母も魔法に秀でていた人物であると聞く。それだけに自分自身の不甲斐なさに打ち拉がれているのだろう。
「ふむ…使えるようになる可能性を1つ、上げてもよろしいでしょうか？」
ここは私が助け船を出すのも良いかも知れない。

かつて私がリリィ様に導かれたように、私が困窮の中にある幼馴染みに光を示そう。
「使えるようになる可能性？」
「これは私の案なのですが、一度マナストーンに触れてみる、と言うものです。」
私は説明する。
魔法そのものがマナの流れを汲むものならば、マナの根源とも言えるマナストーンに触れることで、何らかの変化が現れるのではないか、と。
「今までマナストーンに触れられたことは？」
「…無いわよ。触れる必要なかったんだし。」
「ならば物は試しです。何もしないより、少しでもある可能性に賭けるのも、1つの選択肢ではないでしょうか？」
私はリリィ様にその道を示して貰い、今この場所に居る。ならばこそ、同じように悩む王女を導くのもまた、1つの恩返しとなるのではないだろうか。
「そうね。…まぁ確かに、何もしないで魔法が使えない日々に燻ってるよりも、可能性に賭けた方が良いわ。それに、もしそれでダメならダメで諦めが付くし。」
「ならば氷壁の迷宮へ？」
「もっちろん！アナタはエスコートね！まさか騎士ともあろう人が、魔法も使えないか弱い乙女を、道中モンスターが蔓延る零下の雪原を歩かせるわけ、無いわよね？」

ぐ…!た、確かに護衛は必要か…!しかし私は任務の途中…!それを…!

「折角フォルセナの騎士様がいるんですもの。その実力を見て見たいと思うのは道理でしょう?」

「私の方からもお願いしますブライアン。」

ことわりのじょおうが　あらわれた!

「アンジェラが魔法の使えないフラストレーションをイタズラに発散するものだから、ほとほと手を焼いているのよ。それから解放される案なら願ってもないわ。」

「お、お母様!?」

「アンジェラ王女…そのお年でまだ御転婆でいらっしゃるのですか?」

「そ、そんな目で見ないでよぉ!?」

あれから9年も経って、それでもまだイタズラに精を出すとは…良くも悪くも変わらないのですね王女…。

「すこし任務からは外れますが、引き受けては頂けませんか?」

ここまで言われて断っては騎士の…ひいてはフォルセナの名折れだ。

「畏まりました。紅蓮の騎士の名において、この任を全ういたします。」

「決まりね。」

「よろしくお願いしますね、紅蓮の騎士。」

流石に日が沈んできているので出発は明日にすることにし、今日は休むことにした。早朝から零下の雪原を歩き続け、そのままの足で女王と謁見していたのだから、流石の私も休みたい。

「では城の客室にお泊まりなさいな。夕餉もすぐに用意を。」

「はっ！」

理の女王は侍者に命じると、足早に城内に姿を消した。

「いえ…そこまでご厚意に甘えるワケには…。」

「フォルセナの使者を持て成さず、町宿に泊まらせるなど看過できません。ここは、アルテナの…私の名を立てると思ってお泊まりなさいな。」

ここで断れば女王の厚意を無為にすることになる。となればここは二国の友好にヒビを入れないためにも…。

「畏まりました。そのご厚意にに甘えさせて頂きます。」

「結構。では部屋の準備が出来たら案内させますので、お待ちなさい。アンジェラ、行きますよ。」

「夕餉の時に冒険譚、聞かせてよね！」

やれやれ。

よもやアンジェラ王女の護衛任務とは…

明日の予定に少し不安を覚えながら、私は案内係が来るまでベンチで空を仰いだ。

『遭遇』

翌朝

朝食を終えた私と王女は、理の女王からの支給品を持って厚手のコートを羽織り、零下の雪原へと足を踏み入れた。

「うわ…寒……！」

アルテナの城壁から一歩踏み出す。

今まで温和だった周囲の空気は一変。肌を刺すような寒さが襲い来る。それだけ理の女王による結界の恩恵が大きい証左だ。

「ここから氷壁の迷宮までは大凡昼までに着く予定です。まだ日が射している内に城に戻れるように少し急ぎましょう。」

「そ…そうね。この寒さ、出来れば長居はしたくないもの。」

幸い昨晩は余り雪が降っていなかったのもあり、足取りはそれ程悪くない。これなら存外早く着きそうだ。

「ねぇ。」

道中、無言でサクサク歩くという退屈に耐えられなかったのかアンジェラ王女が口を

開く。
「アンタの道を変えたって人、どんな人なの？」
「どうしたのですか？藪から棒に。」
「だって、何か気になるでしょ？死んだ目をしてたアンタがこんなにも強くなって活き活きしてるんですもの。それだけの影響を与えたのがどんな人なのか気になるのは、何らおかしな事じゃないと思うけど。」
死んだ目…。
あの時の私はそれ程までに窶れていたのだろうか。
「そうですね。…あれはアルテナを出て1ヶ月ほど経ったときでしたか。」
私は道すがら説明する。
私を救ってくれた幼い少女を。
彼女が私の運命を変えてくれた、何物にも代えられない恩人であることを。
思えば、私が光の司祭殿に示されたフォルセナの道を辿らなければ、ガラスの砂漠に足を踏み入れ、また違う運命となっていたのだろう。司祭殿の言っておられた邪悪な何かに出会い、心を染めていたやも知れない。
流石にその分岐までは話すことはないものの、やはりリリィ様の御陰で私はこうして全うに人生を歩めているのだから、感謝も仕切れない。

…しかし、
「邪悪なもの…か。」
ふと右側…西の方角を見れば、海の遥か先に薄らと浮かぶ島が確かに存在する。
ガラスの砂漠。
１０年前の世界大戦終息地
その根幹となる竜帝が眠る地
もしそこへ向かうことを選んでいたら、…今を羨んでいただろうか？
「邪悪なもの？なにそれ？」
「いえ…ただの独り言です。」
もし、たら、れば、は今更考えても詮無きことだ。
私が選んだ今の道、それを歩むことが何より大切なのだから。

見上げれば絶壁だった。

氷で出来た崖と言うに相応しい程のそれは、高々と目の前に聳え立っている。私達が目指していた氷壁の迷宮の名前の由来である。この氷の中に、アルテナの管理下にある水のマナストーンが保管されている。今回は、同行しているアンジェラ王女がそれに触れ、あわよくば魔法を使えるようになる切っ掛けにするのが目的だ。

ポッカリと開いた洞窟…いや、名前にあやかって迷宮への入り口を抜ければ、存外労せずして目的のものを見つけるに至った。

「これが…マナストーン…。」

眼の前に神秘的な輝きを放つそれを初めて見たアンジェラ王女は、あんぐりと口を広げて見上げている。

彼女の気持ちもわからなくもない。何せ、私自身も初めてマナストーンを見たとき、同じような状態だったのだから。

「こんな綺麗な石の中に、神獣なんて恐ろしいバケモノが封印されているのよね。」

「ええ。だからこそリチャード国王は、各国に呼び掛けて、各々の領地内のマナストーンの監視を提案されたのでしょう。」

「まぁウチはともかく他の国々は、英雄王の一声とあっちゃ、無視できないわよねぇ。」

もし、マナストーンが何らかの形で異常を来し、想像したくはないが神獣が世に放たれでもしたら、それこそ世界存亡の危機だ。かつて闇のマナストーンに封じられていた

という神獣ゼーブル・ファー一体が復活しただけでも、世界が滅亡寸前まで追いやられたのだから。

「見たところ、今は異常はないようですし、手早く本懐を済ませましょうか。」

「それもそうね。こんな寒いとこ、ちゃっちゃとおさらばしたいし。」

息も凍りそうなほどに寒いこの氷壁の迷宮。流石の私もこの寒さは堪えるので、出来るならば足早に立ち去りたい。

それは王女も同じらしく、身を震わせながらマナストーンに近付くと、淡い光を放つその石にそっと掌を触れさせる。

「…どうですか?」

「ん……なんとなく、なんとなくだけど。手を通じて私の体に流れるモノ。それがわかる。」

きっとそれはマナの奔流。魔法を扱うものとして、身体の内部にはマナの貯蔵が出来る。それは全身に張り巡らされた血管のように、マナの粒子が駆け巡っている。おそらく、マナストーンからの外的要因が、王女の感覚を研ぎ澄まさせているのだろう。マナストーンに触れることで、何らかの足掛かりになればと思っていたが、なるほど。存外ハズレではなかったのだろうか。

「ん～…でも何かもっとこう…触ったら頭にずびびって、魔法の使い方が思い浮かぶと

思ってたけど…、なんか拍子抜けかも。」
「世の中そううまくいくものではありませんよ。もっとも、こんなことで容易く魔法が使えるようになっていれば、私も騎士になっていませんし。それこそ世界にもっと魔法が普及している筈ですから。」
「それもそうね。結局無駄足かぁ…。ま、収穫はなしだけど、いい気分転換になったわ。」
そもそも賭けに近い提案だったのだ。こうなるのも致し方ない。だが、体を循環するマナの流れを感じること。それが王女が魔法を扱えるようになるキッカケとなれば…。
「では帰りましょうか。…大丈夫。王女なら、きっと魔法が使えるようになりますよ。」
「気休めでも、今はなんかそんな気がするわ。前なら癇癪起こしてたかもだけど。」
「ほほぅ…それだけ王女が大人の落ち着きを持てたと考えれば……、む?」
氷壁の迷宮の出口へと向かう中、ふと私は歩みを止め、そして後ろからついて来る王女を手で制して止める。
「な、なに?どーしたのよ?」
王女が不思議に思うのも無理はない。
私とて微かなその気配を感じ取るのが精一杯なのだ。
そしてそれは、私達が向かわんとする先…氷壁の迷宮の出入口から感じるのだ。
『チ…闇討ちで一気に仕留めようと思っていたが…流石はフォルセナの騎士といったと

ころか…。』

そしてそれはおどろおどろしい気配を露わにすると、幻影のように景色を歪ませてその姿を現した。

緑のローブに赤い血のようなマント。その頭には龍の頭部を模した兜。そして背には同じく一対の翼。そいつの放つ圧は、まるで身体に突き刺さらんばかりにこちらを穿ってくる。

「…何奴だ?」

『我が名は竜帝。素晴らしい提案をしよう。お前達も我が眷属にならないか?』

……

ここは驚くべきなのだろうか?

だがしかし、奴の放った勧誘の言葉が、虚しく氷壁の迷宮に木霊していた。

『だが断って、そしてバテる』

「ならない。」

その一言が、私の、そして王女の意思だった。

竜帝

かつてこの世界で戦いを引き起こした張本人。

だが奴は、黄金の騎士ロキと刺し違えてその命を落としたはず。にも関わらず、なぜこうして眼の前にいるのだろうか。

私そんな疑問を浮かべ、そして、竜帝と名乗った男の気配に気圧され、私の後ろに隠れる王女。

そんな私達の心境を他所に、竜帝は言葉を続けた。

「見れば解る。お前の出で立ち、強さ。騎士だな?」

「私は紅蓮の騎士ブライアンだ。」

「ブライアン。何故お前が至高の領域に踏み入れないのか教えてやろう。それはお前がただの人間だからだ。闇の力を持たぬからだ。」

どうやら奴は闇の力を以てして眷属を増やしているようだ。新手のキャッチセール

スのように、嬉々として自身の眷属の素晴らしさとやらを宣伝している。
「我が眷属になれ、ブライアン。そうすれば一国を滅ぼす力を手にする事ができる。強くなれる。」
「本当に、眷属になれば…強くなれるのか？」
「ブ、ブライアン!?」
強くなれる。
何と言う甘美な響きか。
その蜜のように甘く、そして微睡むかの如き言葉に、私はその言葉を口にした。
竜帝は私が乗り気と考え、ニヤリと口元を釣り上げる。もう少し、あとひと押しだと確信めいたように。
「あぁ、そうだ。我が眷属となれば、強大な力を得て、何もかも思うがままだ。さぁ、言え！我に忠誠を誓うと！」

「だが断る」

「ナニッ!?」
「誰が貴様の眷属になどなるものか。私が命を捧げる方は、既に我が心に何よりも硬く誓いを立てている。」
　あの方以外に私の心なる忠誠の主足り得ない。ましてや、世界を滅ぼさんとしたであろう輩の眷属になど、誰がなってやるものか。
「ならば貴様等を屠り、その屍を我が駒としてくれよう。そして今一度、我が覇道、この世界に轟かせてくれるわ！」
「悪いが。」
　私は剣を抜き取ると、その切っ先を竜帝へと突き付ける。
「私は生きて帰らねばならん。そしてそれはアンジェラ王女も同様だ。」
「ほう…先程の魔力の奔流…なるほど。アルテナの王女か！クククッ…益々眷属に欲しくなったぞ！」
「貴様如き下郎に、王女に触れさせはせん。」
「ならば我が力の下、無様な屍を晒すが良い!!」
　そう言って竜帝は身を丸めると、まるで地の底から響くような唸り声と共に、その体を震わせる。
　それと比例して、やつの身体から滲み出るのは、先程とは比にならない程の重圧…い

や、殺気。
私は今迄幾度となくこれを浴びてきたから問題はないが、私の背に隠れる王女はそれに圧されて体を震わせていた。
無理もない。
故に、命のやり取りなど、一国の王女がすべきではないのだ。
「王女、お下がりを。」
「あ、アンタはどうすんのよ?」
「無論、ヤツを討ち果たすまで。」
「あ、相手はあの竜帝よ!?」
そう、竜帝。
かつてフォルセナ軍と戦争を繰り広げた竜の軍団の首領。
その力は、フォルセナ最強の騎士であるロキによる捨て身の相討ちで何とか倒せたほどの相手。そんな奴が相手なのだ。王女の懸念も無理はない。
だが、ここを突破せずして生き残れない。だからこそ立ち向かうのだ。
『クククッ…その小娘の言うとおりだ。我が前にしてたった一人で挑もうなどとは…片腹痛いわ!』
竜帝はその姿を変えていく。人であったその形は、見る間に肥大化していき、氷壁の

迷宮の天井ほどまで届かんばかりの首を持った巨大なドラゴンへと姿を変えた。
『さぁ、その体を物言わぬ躯へと変え、我が手先へと変えてくれる！覚悟はいいか！小童！それとも、戦えぬ王女を守りながら、我を討ち果たせるか？』
「『任務を遂行する。』『王女を守る。』両方やらなくっちゃあならないのが、『騎士』のつらいところだな。

覚悟はいいか？私はできている」

一方
漁町パロ

早朝にその港へと寄港した船から、一人の青年が町へと足を踏み入れる。
長い船旅だった。
吹き抜ける潮風が歓迎とばかりに、長く伸ばしたその茶髪を撫で上げていく。
「やれやれ、やっとこさローラント領かよ。」
船旅で凝り固まった身体をほぐしながら、青年…デュランは一人ごちる。
思えばこんな遠方まで一人で来たのは初めてだ。基本的に騎士団の任務はフォルセナ領内、若しくはその領界で収まっていたのだ。それがよもや船ではるか南東のローラントまで行くことになろうとは、予想だにしなかった。
「で、長い船旅の次は登山か…。気が滅入るな。」
パロの敷地から一歩出れば、遥か天を臨むローラント山岳地帯。目指すはその上部に位置するローラント城。そこに至るには山道である『天かける道』と言う、長い道程を経なければならない。正直、見上げるだけで嫌になりそうだ。
「っと！こんなとこで尻込みしてたら、いつまで経ってもアイツにゃ敵わねぇ！これも訓練だ！」
へたりかけていた心を奮い立たせるべく、デュランはパンパン！と甲高い音を立てて、両頬を数回叩く。鋭い痛みと共に、腑抜けていた心が抜けていくのを感じた。
一人での外国への任務。それは国王陛下からの信があればこそ。そして自分はそれ

に応えねばならないのだ。

「行くぜローラント!うぉぉぉおおおおおお!!!!」

天かける道の勾配に対し、まさかの全力疾走。

気合十分体力十分。

そして最初からの全力全開。

誰がどう見ても途中でバテる構図しか思い浮かばない、デュランの初任務。その文字通りの山場に足を踏み入れた。